

『はあ。——何でも、珠ちゃんとかいつておましたわ。』

『ちや、珠子さんだ。』

青木は眉をひそめると、不思議さうに首をかしげたが、

『珠子さんなら、あのアパートの管理人の娘だから、僕が、こゝにゐることは、よく知つてゐるはずなのに。』

と、つぶやいた。

『でも、宿はわからないと言つてゐらつしやいましたわ。』

『へんだな。』

青木は、ちよつと考へるやうにしたが、すぐに氣を變へたやうに、快活な調子になつて、

『そんなことは、どうでもいいが、とに角よく來てくれた。それにしても、こゝにゐることが、直ぐにわかつて、何よりのことだつたな。』

と、言つた。

『わたし、宿屋を一軒々々、探して歩くつもりでしたの。』

『それでは、とても分らないところだつたよ。僕などのやうな貧乏畫描きは、一ヶ月も二ヶ月も、宿屋なんかに滞在して畫を描くなんて、そんな贅澤な真似は、經濟的に許されないことす

からな。』

『棧橋で、あのお爺さんに聞いたのが、よかつたのですわ。』

『さうでなかつたら、折角、大島まで來ても、とても逢へないところだつたかも知れなかつたな。』

『ほんたうに。』

美登里は頷いたが、心では慄然として、をのゝかすにはゐられなかつた。それにしても、あのアパートの若い女は、なぜ、こゝを教へてくれなかつたのだらう？ どうしてあんなに、自分たいてして敵意を示したのだらう？ と、美登里は今更のごとく、不思議な氣がした。

『君は、その後の郷里の消息を、何か聞いた？』

青木は、話頭を轉じた。

『いゝえ。』

美登里は、かすかに頭を掉つて、低く俯垂れた。

『ちつとも知らない？』

『ええ。』

『東京に出て來たのは、いつごろのことなの？』

『上京すると直ぐに、先生のアパートを、お訪ねしましたの。』

『ちや、東京には、昨日出て来たばかりぢやないか。』

と、青木はびつくりした。

『ええ。』

『僕は、また、疾つくに上京してゐるのだらうと思つてゐた。』

『上京したら、わたし直ぐに、先生をお訪ねするつもりでしたの。そして、いろ／＼と相談しなければならぬことが、澤山あるものですから。』

『ちや、君は、宮内君のことは、何も知らないのだね。』

『ええ。』

と、かすかに頷いたが、美登里は顔をもたげると、眞直ぐに青木の顔を見つめて、一生懸命に、

『あの、宮内さんが、どうかすつたのでせうか？ 先生は、宮内さんのことを、ご存じでせうか？ 宮内さんが、どこにゐらつしやるか、知つてゐらつしやるのでせうか？ 上京なすつてから、宮内さんに、お會ひになつたのでせうか？』

と、急ぎ込んで、何もかも一時に聞いて、息を呑んだ。

愛人の問題

一

美登里が、どんなに焦つて聞いても、しかし青木は、たゞニヤ／＼するばかりで、すぐにはどうしても、何にも話してくれなかつた。

『まあ、いいさ。そんなに顔色まで變へて、焦らなくても。』

と、思はせぶりの顔色をして、でも、宥めるやうに言つた。

『宮内君のことについては、いづれゆつくり話すことにしよう。——美登里さんが、聞きたくなさうとしても、宮内君のことについては、話さなければならぬことが、どつさりあるんだから。』

『どんなことでせう？』

美登里は、息を弾ませて、詰め寄るやうにした、緊張した表情が硬張つて、眠り不足で、いくら腫れぼつたい感じに見える双の眼が、異様にキラ／＼とかゞやいてゐた。

『後で、落着いてから、ゆつくり話すことにする。』

と、青木は何か息ぐるしさうにして、顔を反けた。

『あの、いいことでせうか？ それとも、悪いことでせうか。』

『そんなに追究しなくても、いいぢやないか。はは、ムム。』

青木は顔を反けたまゝ、聲だけは快活に笑つたが、

『それよりも、君も疲れたらうから、すこしやすんだら？』

と、やさしく言つた。

『ムム。』

美登里は、かすかに頭を掉つたが、しかし、青木からさう言はれて見ると、神経だけは、ひどく興奮してゐるけれども、肉體は、はげしい疲労におそはれてゐることが、わかつた。

考へて見ると、S——の山奥から出發してから、凡そ三日間といふもの、大半は汽車や、電車や、汽船の中で過して、落着いて休息した時間といふものは、ほとんどない。昨夜なども、全く一睡もしてゐないのである。大島に着いても、果して青木先生に會へるか、どうか分らないと思ひ、前途のことを考へると不安ではあるし、それに機關の音が耳について、どうしても眠れないのであつた。

肉體と神経とを虐待し、酷使した三日間だつた。しかも、病後から引きつゞいて怪我をして、やうやく癒つたばかりのところである！ 斯うして會ふ人に會ひ、いくらかでも落着いて見る

と、今まで氣の附かなかつた疲労が、一時に出て来て、坐つてゐる身體すら、支へかねるやうな有様なのに、我ながら驚いた。

『どつちにしても、僕が斯うして會つた以上、決してわるいやうにはしないから、安心してゐるといい。』

やがて青木は、何か心を取り直したやうに、深切な調子になつて、しみじみと言つてくれた。

『宮内君のことも、僕が知つてゐるだけのことは、すこし落着いてから、すつかり話して上げるし、後々のことも、それからよく相談することにしよう。——だから、ともかくそれまで、ゆつくり安心して、やすむことにしなさい。』

青木が、以前のやさしい女學校の先生の態度になつて、懇々言ひ聞かせると、美登里は素直に、

『どうも、いろいろ有難うございます。よろしくおねがひいたします。』
と言つて、うなづいてゐた。

二

光線の關係で、ちやうど午前の十時から、午後の二時までが、晝を描く時間になつてゐた。

椿の林の傍の牧場で、柵の中の牛を三頭、寫生するのであつたが、二時すぎると、太陽の工合

で、椿林の影がなくなつてしまふので、都合がわるかつた。

青木は、十時までは、カンヴァスに向へるやうに、支度をととのへた。家を出かける前に、隣りの部屋を覗いて見ると、美登里は頭を枕の上に行儀よく載せて、まるで天使のやうな美しい、氣高い顔をして、すやくと眠つてゐる。

眉と眉との間に、何か暗い影のやうなものが残つてゐるが、汚れも知らなければ、罪も知らないうちに、實に純潔な寝顔である。眉と眉との間の暗い影は、恐らく密月の旅の途中から逃げ出してしまつてから、今までの間の苦勞の滓が残つて、それが消えてゐないせゐであらう。

(何といふ天真な、何といふ無邪氣で、可愛い、美しい顔をしてゐるのだらう！)

じつと見入つてゐるうちに、青木は激しい感動に打たれて、ぞくぞくと身慄ひを感じ、口の中ですぐと、思はずその清らかな顔に、そつと接吻をせずにはゐられないやうな、衝動に驅られた。

が、すぐに青木は、ハツとして氣が附いたやうに、

(イヤ〜)

と、自から戒めた。

餘りに美しく、餘りに清らかである故に、青木は自分で自分の慾望が、ひどく忌はしく、は

げしい嫌惡を感じずにはゐられなかつた。

肩から掛けてゐる繪の具箱、右手に提げてゐる三脚や、カンヴァス、それ等のものゝ觸れ合ふ、どんなかすかな物音も立てないやうに、細目にあけてゐた襖を、そつと閉めると、足音を忍ばせるやうにして、階段を降りて行つた。

秋晴れのいい天氣だつた。

いかにも南國の空らしく、どこまでも〜眞蒼に澄み渡つてゐる。指の先が觸れば、指の先が空と同じ色の青さに、染まりさうである。

この頃、また活動が盛んになつたといふ三原山は、黒い、濃い煙を、しきりに吐き出してゐる。いくらか北風があるのだらう。煙は南の空へと靡いてゐる。

振り返ると、相模灘の黒潮が秋のかどやかましい日光を受けてキラ〜と光つてゐるし、對岸や、山脈が、雲か霞のやうに仄かに煙つて、獨り富士山の秀でた頂が、眞白に大空を突き刺すやうに、群山を抜いて、聳えてゐるのが、何か神々しい感じに見えるのであつた。

畫家が、一度パレットを搦んで、カンヴァスに向へば、戀もなければ、名譽もない。あらゆる俗念は、すべて解消して、たゞ、描きつゝある畫そのものに、全身全靈を打ち込んで、必死になつて取組み、腕を揮ふだけである。

斯くして青木は、午前の十時から、午後の二時頃まで、食ふことも、飲むことも、一切を忘れて、描きかけの牛の畫の中に、全精神を没頭してゐた。

日が廻つて、椿の林の影がなくなつて、かなり疲労を感じて來た。もう今日の仕事は、切り上げようかなと、一人で思つた時、後で、かすかに人の氣配がするのに氣が附いて、振り返つた。

三

『やあ、美登里さんだつたのか。』

青木は、椿の林を背景にして、明るい日光の中に立つて、微笑をふくんでゐる美登里の姿を見ると、その何とも言へない氣高い美しさに打たれて、思はず胸がドキ／＼と波打つた。

『もう先刻から、こゝに來て、立つてゐたのですか？』
と、息を弾ませた。

『ええ。』

美登里は、ニツコリして頷いたが、今朝見た時とは、まるで見ちがへるばかりの美しさに、かがやいてゐた。

ぐつすり眠つたので、氣力を回復したのだらう。瞳が澄んで、血色なども生き／＼して來てゐるし、表情が若やかに、發刺としてゐた。

『よく眠りましたか？』

青木が聞くと、

『ええ。』

と、うなづいて見せた。

『美登里さんが、こゝに來てゐることを、僕は今まで、ちつとも氣が附かなかつたのです……』

青木は、きまりわるさうに、すこし顔を赧めた。

『一生懸命に、畫を描いてゐらつしやいましたから。』

『ちよつと、聲をかけてくれれば、好かつたのです。』

『だつて、お邪魔しては、わるいと思ひましたの。』

『ちつとも構はなかつたのです。』

『でも、先生が、畫をお描きになるところを、久しぶりで見てゐまして、勉強になりましたわ。』

『はは／＼／＼。これでも、いくらか参考になつたですか。』

『わたしも、久しぶりで、畫が描きたくなりましたの。』

『大島にゐる間に、すこし落着いて、描いて見たら、どうです？』

青木は、急に双の眼をかゞやかして、熱心にすゝめたが、

『えー……』

と、美登里は煮え切らない態度で、力なく俯垂れた。

『繪の具でも、カンヴァスでも、美登里さんが描くくらゐは、十分間に合ふはずですから、ほんたうに描いて見ませんか。——さうすれば僕は、どんなにも一生懸命になつて、教へて上げますよ。』

青木は、更に熱心に言つた。

『さう出来れば、わたしだつて、どんなに嬉しいか、知れないのですけれども……故郷を出る前から、何んだ彼だと忙しかつたものですから、ちつとも畫筆を持つ暇がありませんでした。だから、景色を見ても、靜物を見ても、すぐに畫が描きたくなつて、たまりませんの。』

『えー……でも、さうしてはゐられませんの。』

と言つて、美登里のかなしさうな眼が、うつたへるやうに青木を見たが、その眼は、かすかに涙にうるんでゐた。

四

『なぜですか？』

と、青木から聞かれても、美登里は、突嗟には答へられなかつた。

『そんなに急いで、東京に歸らなくても、いいのでせう？』

青木は、重ねて聞いた。

『でも、わたし、こゝに落着いてはゐられませんの。』

『すぐに、東京に、引つ返さなければならぬのですか？』

『えー。』

美登里は、かすかに言つて、でもキツパリ頷いた。

『どうして、そんなに東京へ引返すことを、急ぐんです。』

青木は、怨めしさうに言つた。(急いで、東京になど引つ返す必要はないのです。)と言ひたいところを、さすがに、さうまでは言へなかつた。

『わたし、宮内さんに、會はなければなりませんの。』

美登里は、言ひにくさうに、顔を赧らめて言つた。

『そんなに急いで、會はなければならぬのですか？』

と、青木は怒つたやうに言つた。

『いろ／＼相談しなければならぬことが、あるものですから。』

青木は、(相談したつて、無駄ですよ。)と言ひたいところを、我慢して言はなかつた。そして何気なく、

『生活のことですか?』

と、聞いた。

『ええ。』

美登里は頷いて、

『それもあるけれども、いろ／＼なことを、相談しなければなりません。それから第一に、宮内さんの行衛だつて、探さなければなりませんわ。』

と、言つた。

『美登里さんは、宮内君を、そんなに手頼りにしてゐるんですか?』

『ええ。』

『宮内君が、あなたの手頼りになつてくれると、思つてゐるんですか。』

『ええ。——だつて、わたしたちは、約束したんですもの。』

『さうですか。——二人は、約束してゐるんですな。』

青木は獨りごとのやうに呟いて、うなづいたが、

『ですが美登里さん、人間なんて、どんな工合に變つてしまふか、分らないものではないでせうか?』

と、かなしさうに言つた。

『と、おつしやる意味は?』

と言つて、美登里は不安さうに、息を呑んだ。

『つまり僕は……約束なんて、當てにならないといふことを言ひたいのです。あなたが、若し、約束に破れるやうなことがあつても、あまり悲しんだり、取り亂したりしないやうに、初めにハツキリと、そのことを言つておきたいのです。』

『本當のことを、どうぞハツキリと、おつしやつて下さいませんか。——宮内さんに、何かあつたのでせうか?』

美登里は、何かに怯えたやうに、必死になつて叫ぶと、しきりに肩を喘がせてゐた。

絶好の機會

青木が、若し卑屈で、利己的な人間なら、どんなにでも宮内のことを、美登里の前に悪く言つ

て、二人の間を離隔するのには、こんな絶好の機会はないはずだった。

いくら美登里が、處女の純情をさゝげて、慎之助を愛してゐるとしても、この頃の慎之助の本當の心を知つたなら、諦めるよりほかはないだらう。

美登里が、慎之助を諦めた結果は、どうなるか？ 一旦、逃げ出してしまつた利一郎のところに、このまゝおめく歸るわけには、いかないだらうし、さうかといつて、父や義母のところなど、もちろん、何の面目があつて、歸つて行かれるだらう！ どこにも行きどころのない美登里が、廣い東京に、知己といつては、たつた一人の青木を手頼り、青木を手頼つてゐるうちに、次第にその心が傾いて來ないはずはない。何といつても、まだ世馴れない處女である。どんな手段を盡してでも、美登里の氣持を、籠絡出來ないことはないだらう。

だが、潔癖で、清純な青木の性格としては、そんな卑劣な策略を弄することが出来なかつた。そればかりではない。青木としては、自分の口から、この頃の慎之助の本當の氣持を、話して聞かせるに忍びなかつた。どんなに失望し、落膽し、どんな打撃を受けるかと思へば、それが辛くて、かなしいばかりではない。いくら本當のことでも、自分の口から、慎之助の氣持に望みがないことなど、なるべく言ひたくなかつた。自分が美登里を深く愛してゐるだけに、何か戀愛の敵手の悪口でも言ふやうな氣がして、イヤだつたのである。

でも、それを言はないのも、美登里にたいして、あまり不親切なやうに思へて、氣が咎めた。知らないなら兎もかく、知つてゐるのである。そのために慎之助とは、葉山の海岸で、ほとんど絶交の宣言までせんばかりにして、はげしい口論をした。美登里を愛すればこそ、美登里のために辯解し、慎之助の頑固な誤解と、その誤解に基づく怒りと、恨みとを解かうとした。しかし、それは、たうとう駄目だつた。青木の苦衷は、何の効もなく、物別れになつてしまつた。

その事情を、すっかり美登里に、話さないわけにはいかなない。若し、このまゝ知らん顔をして、慎之助の居所だけ教へて、突然、美登里が會つて、慎之助の本當の氣持を知つたら、それこそ、どんな結果になるか知れない。絶望の果、いかなる自棄を起さないとも限らないし、自殺でもするやうなことがあるかも知れない。

とにかく青木は、自分から慎之助の本心を、豫め話して聞かせて、將來の注意も與へてやるのが、一番正しい、本當の道だと決心しながら、やつぱりそれが、いいことでないだけに——美登里を喜ばせるやうな話でないだけに、どうにも言ひにくく、容易には切り出せなかつた。でも、やつぱり話さなければならぬ時が、來ずにはゐなかつた。

晝架や、三脚を片付けて、一旦、荒物屋の二階まで歸つて來ると、そこでも落着いては話しく、

『ちよつと、散歩に行かなさ。』

と、誘つた。

海岸でもブラ／＼歩きながら話すのが、一番話し易いやうな気がした。

『ええ。』

とは言つたが美登里は、すぐに立たなかつた。

『どうしたの？』

青木は、もう立ち上つてゐた。

『疲れた？』

と、やさしく聞いた。

『散歩よりも、あたし、宮内さんのことを、早く伺はせて頂きたいわ。』

美登里の懇へるやうな、可憐らしい眼ざしが、かなし氣な微笑をふくんで、青木を見上げた。

『そんなに、宮内君のことが、氣にかかる？』

『ええ。』

『歩きながら、話したいんですが。』

『さう。』

『だが、美登里さんは、足をわるくして、歩くのが苦痛かしら。』

『いええ。』

と、美登里はあわてゝ打ち消して、もう立ち上つてゐた。

『ちつとも、苦痛ぢやないわ。——だつて、すこし跛になつただけで、もう癒つたんですもの。』

歩きながら話すと言へば、一刻も早く慎之助のことが聞きたい餘りに、いそ／＼として青木の後に従ふ美登里だつた。——その氣持を考へると、青木は涙ぐましいほど可憐しかつた。

『美登里さん。どんなことを聞いたつて、決して失望することはないのですから……そのつもりで。』

と、青木は海岸を、しづかに歩きながら、先づ念を押した。

『ええ。』

と、うなづいたが、美登里は不安に蒼ざめて、恐怖に満ちたやうな眼が、おど／＼と青木の顔を見ると、

『宮内さんは、あの、結婚でもなすつたのでせうか？』

と、息を呑んだ。

そして、美登里の足は、いつの間にか砂の上に、びたりと立ち留つて、かすかに慄へてゐた。風がなく、よく晴れた、秋の日は短かく、しづかな夕暮れに近い時刻である。遠くの沖のほうは、秋には珍らしく、とろりと霞んだやうに薄曇りがして来てゐた。海面は静かで、よく風いであるのであつたが、それでも渚に近づくに従つて、次第々々に水面に皺がたゞまれ、いよ／＼波元まで迫つてくると、白い、低い波頭を立て、ぼちやりと崩れる。

それが、美しく濡れた砂濱の上を、滑るやうにして、二人の足もとまで這ひ寄つてくるのであつたが、また、ちよろ／＼と退いてゆく。

『イヤ、そんなことはありません！ 決して、結婚なんかしてゐません。』

青木も、いつか美登里といつしよに立ち留つてゐたが、頭から結婚してゐるのかと、思ひ切つて聞かれると、強く否定せずにはゐられなかつた。

三

『さう！ 結婚してはゐらつしやらないのですわね。』

美登里はホツとして、かすかに溜息を吐くと、

『わたしは、また、先生が、あまり話しくさうにしてゐらつしやるものですから、若しかした

ら宮内さんは、東京に出ていらしてから、結婚でもなすつたのではないかと、どんなに心配したことか知れませんか。でも、結婚なんかしてゐらつしやらないのですわね。まあ、好かつた！ 若し、そんなことがあつたら、わたしは、どうしたらいいかしらと思つてゐたのに。』

と、美登里は、憤之助が結婚してゐないと聞くと、安心して、氣もこゝろも、軽くなつたのだらう。早口に喋べると、ニツコリ微笑した。

『宮内君は、結婚なんかしてゐませんが……しかし、あなたにたいして、とても怒つてゐますよ。』

『さう。』
『あんなに怒らなくなつて、いいのではないかと、僕なんか思ふくらゐですけれども……』
『さう。——そんなに怒つてゐらつしやるの。』

と、かなしさうに溜息を吐くと、でも、すぐにそんなことは、思ひ諦めたやうに、健氣に、
『でも、仕方がないわ。——宮内さんがお怒りになるのは、當り前なんですから。わたし、約束の通りに、實行することが出来なかつたのですから。約束した通りに、二人がいつしよに、あの時東京に出て来てゐれば、よかつたのですけれども。』
と、言つた。

『しかし、思ひがけない事故のために、仕方がなかつたのですからな。』
『ええ。』と、美登里は力を得たやうに、深くうなづいて、

『ですから、あたし宮内さんに會つたら、本當のことを、ありのままに話して、お詫びしようと思つてゐますの。事情さへわかれば、宮内さんだつて、許して下さらなはずはないと思ひますわ。』

美登里は、純真で、さつぱりした自分の性質から、慎之助の怒りを、單純に考へてゐるのであつた。

『だが、宮内君は、ナカ／＼根強く怒つてゐるやうですから……』

『ええ。わたしにも、とても酷い手紙を下さいましたわ。でも、本當のことを正直にお話して、お詫びをすれば、わかつて下さらなはずはないと思ひますわ。』

『僕が會つて、話をした時には、とても凄いいんまぐでしたよ。』

『それで宮内さんは、今、どこにゐらつしやるのでせう？』

『後で僕が、ちやんと書いて上げますから……』

『わたし、今夜の汽船でも、歸りたいのですけれども。』

『今夜の汽船と言へば、四時出帆ですから、もう直ぐですよ。』

青木は、残り惜しさうに、寂しさうに言つた。

だが、いくら引き留めようとしても、決して留まらないことは分つてゐる。——行く者をして行かしめるよりほかは、仕方がなかつた。

『それで、わたし、先生におねがひがあるんですけれども。』

『どんなことですか。』

と、聞かれても、さすがに美登里は、言ひにくさうに、

『あの……』

とだけ言つて、ほのかに顔を赧らめると、口ごもつてしまつた。

『美登里さんの頼みなら、僕は、自分の力で出来ることなら、どんなことだつてして上げますか』

『さ。』

それは、たゞ言葉だけではない。心からさう思つてゐた。

『ありがたうございます。』

いつに變らぬ青木先生の深切に、美登里は思はず臉をうるませて、頭を下げずにはゐられなかつた。

『どんなことですか？』

「わたし、東京へ歸る汽船賃もございませぬの。」
「お金ですか。」

「ええ。——汽船賃さへあれば、いいんですけれども。」
美登里は、眞赤な顔をして、必死に青木を見た。

「そんなことなら、何でもないので。澤山のお金なら、僕の力には及びませんが、それくらいのことには、いつだつて間に合えますから、どうぞご心配なく。」

「わたし、こんなことまで先生におねがひして、ほんたうにすみません。——恥かしいわ。」
と言つて美登里は、燃えるやうに火照つた顔を、両手で掩うてしまつた。

四

午後の四時に出帆する汽船が、その夜の十時には、芝浦に着く。

四時の汽船に乗るのだとすれば、緩くり話してゐる暇もない。二人は、急いでまた荒物屋の二階に歸ると、美登里は東京へ歸るために、青木は、それを見送るために、棧橋まで引つ返して來た。

青木は、自分で切符を買つて、それに十圓紙幣を一枚添へて、美登里に渡さうとすると、彼女は、切符だけは受取つたが、紙幣は受取らなかつた。

「一文も小遣がなかつたら、東京まで歸つても、すぐに困ることになるぢやありませんか。」

青木が、叱るやうに言つても、美登里は飽まで遠慮深く、

「でも、宮内さんに會ひさへすれば、何とかなると思ひますから。」

と言つて、どうしても受取らうとしなかつた。

しかし、宮内と會つたところで、何もそんな相談など出来ないこと分つてゐる青木としては、ただ、切符一枚だけで、美登里を一人、東京に歸してやることは、どうしても出来なかつた。

「いいから、僕の言ふことを聞いて、持つて行つて下さい。無駄になつたつて、いいぢやありませんか。」

「それは、無駄になるなんてことは、ございませぬけれども。」

「お金ですだから。決して、邪魔にはなりませんよ。」

「ええ。」

「必要がなかつたら、今度お目にかゝつた時にでも、返して下されば、いいぢやありませんか。」

「すみません。」

美登里としては、さうまで青木が深切に言つてくれるものを、一應、受取らないわけにはいか

なかつた。

『それから僕は、もう一つ美登里さんに、よく言つておかなければならないことがあるんですが。』

『どんなこと?』

と言つて美登里は、青木の顔を仰いだが、棧橋に集うた人々が、汽船に乗り込む時間が迫つて来たので、人々は次ぎくと、もう舳舟に乗つてゐた。

『それは、どんなことがあつても、決して失望してはイケないといふことです。』

『は。』

『失望して、自棄を起して、取返しつかないやうなことをしてはならないといふことです。』

『よく分りましたわ。』

『僕は、いつだつて、美登里さんの味方ですから!』

『ありがたうございます。』

『僕のことを忘れないで……失望したり、困つたり、途方に暮れたりした時には、どうぞ僕のことを思ひ出して、僕に相談して下さい。』

青木は、眼をうるませて、聲がかすかに慄へてゐた。

『先生のお言葉は、決して忘れませんから……』

と、美登里も涙ぐんで、低く頭を下げた。

『若し、どこへも行くところがなかつたら、一先づ、僕のアパートに落着いて、すぐに手紙を下して下さい。』

『は。』

『さうすれば僕は、飛んで歸つて、美登里さんのために、どんな方法でも考へることにしますから。』

『え。』

と、美登里は頷いたが、すぐにニツコリして、

『でも、この上先生に、ご心配をかけることはないだらうと思ひますわ。宮内さんの居所が、わかつたのですもの。宮内さんと相談すれば、きつと工合よく行くと思ひますから……』

と、言つてゐる中に、舳舟に急かして立てられて、美登里は乗らなければならなかつた。

『ちや、氣を付けて……本當に僕のことを忘れないで、何かの時には、きつと相談して下さい。』

青木は、舳舟が少し動き出したのを、追ひかけるやうにして、棧橋の上を歩きながら、もう一度念を押した。

飽まで慎之助を信じ、どこまでも手頼つてゐる美登里が、やがて慎之助に會へるといふので、希望にかゞやいて、明るい、うれしさうな顔をしてゐるのが、青木の眼には、一層傷ましく映つた。——これからが心配で、自分もいつしよに、東京へ歸りたいと思つた……

美登里の希望

その日、慎之助は、欣一の勉強はすましたし、この頃から通ひ始めてゐる神田の學校の夜學部に出かけて行くのは、まだ少し早い時間だし、裏庭の犬舎で、これから運動に連れて出ようとして、二疋のセファードに、ブラツシを當てゝゐた。

「ラツク— ラツク— これ、シツトだ。シツトするんだ。」

犬舎から出された牡犬のラツクが、うれしさの餘り、ぐる／＼と慎之助の周圍を駆けまはり、鼻を鳴らして飛び附いて來るのを、やうやくのことで制すると、鎖を首輪につなぎ、首から背と、硬い毛のブラツシを、せつせと當てゝゐた。

「宮内さん。」

ばた／＼と、誰か後に駆け寄つて來た氣配がしたと思つたら、あわたとしく美津江の聲が呼び

かけた。

「何か、ご用ですか？」

慎之助が、犬の毛を擦る手を止めて、振り返つて見ると、華やかな姿をした美津江が、たどたどらぬ緊張した表情をして、息を弾ませて立つてゐた。

「大へんよ。」

「どうしたんです？」

「來たわ。」

「誰が？」

「例の人が。」

「例の人つて？」

慎之助には、何が何だか、さつぱり分らなかつた。

「ほら、いつか、あなたが話してゐたぢやないの。」

「誰でせう？」

慎之助は、小首をかしげるやうにして、考へて見た。

「あなたを裏切つた人！」

『えつ。』

『あなたの以前の愛人よ。』

『本當に、訪ねて来たのですか。』

慎之助は、さすがにサツと、顔色を變へずにはゐられなかつた。

『あら、イヤだわ。すぐに顔色まで變へるんですもの。』

美津江は、つんとした。

『さういふわけではありませんが……』

慎之助は、ちよつと照れたが、すぐに落着いて、

『それで、どうしたのです？ 歸つたのでせうか？』

と、聞いた。

『やつぱり、氣になるのね。』

美津江は拗ねたやうに言ふと、顔を背けた。

『僕が、こゝにゐることなんか、分るはずはないのだが……』

『でも、分つたから、わざわざ訪ねて来たんぢやないの。——田舎から、わざわざ出て来たのよ。』

『どういふわけで来たのか、それは分かりませんが……今では結婚して、人の妻になつてゐる女ですから。ですが、歸つたのでせうか？』

『ええ。』

美津江は、怒つたやうに、はげしく頭を掉つた。

『ちや、まだ、ゐるのですか？』

『ええ。』

と、美津江は頷いて、

『あなたに會はせてくれたつて、待つてゐるわ。——あなたに會ふまでは歸らないつて、頭張つてゐるのよ。』

と、忌々しさうに言つた。

『さうですか。』

慎之助は、ちよつとの間、複雑な表情を動かすと、さも／＼當惑したやうに、溜息を吐いた。

『お會ひになるの？』

『……………』

『歸しても……』

「……………」

慎之助は、美津江から追究されても、黙つて考へ込んでゐた。

『どうなさるの？』

必死に聞かれると、慎之助は、やうやく蒼ざめた顔を擡げて、

『歸して下さい。』

と、決然と言つた。

『會はなくてもいいの？』

と、美津江の聲は思はず彈むのを、どうすることも出来なかつた。

『僕は、會ひませんから。さう言つて歸して下さい。』

と、慎之助は繰返した。

『本當に、歸してもいいのね。』

『會ふ必要がないから……と、さう言つて下さい。』

『ぢや、歸すわ。』

『僕は、犬の運動に、裏門から出て行きますから、歸して下さい。裏切られた女なんかには、會ふ必要はないのですから！ どうぞさう言つて、歸して下さい。』

言ひ捨て、慎之助は、ラックの鎖を持ち、牝犬のチェリーは、口笛を鳴らして呼びながら、裏門から出て行つてしまつた。

二

もつと詳しいことを話してくれるのかと思つてゐたのに、青木のはうでも、なぜか話してはくれなかつたし、また、美登里のはうでも、聞かうとしなかつた。たゞ、慎之助が無事であることと、その居所とがわかると、後は青木の言ふことなど、碌々耳にも入らず、早く會ひたい一心で、急いで東京に歸つてしまつた。

その夜は、新橋附近の旅館に一泊し、翌日は、あまり朝早く訪ねるのも、人の家で働いてゐる以上、その家にたいして悪いと思つて、午前中は遠慮した。

やうやく、午後になるのを待ちかねるやうにして、道を聞き／＼来て見ると、案内通りに歸いたばかりではない。時間も相當にかゝつて、三時過ぎになつてしまつた。

（こんなことなら、何もお晝すぎになるまで待つことはなかつたわ。もつと早く、出かけて来ればよかつたのに。）

と思つたが、案内も知らなければ、上目黒といつても、どつちの方角やら、まるきり見當も附かない美登里としては、仕方がなかつた。

それに上目黒は、何丁目もあつて、ナカ／＼廣く、あつちを尋ね、こつちを尋ねして、まごまごしてゐるうちに、三十分や一時間は、すぐに經つてしまつた。

でも、やうやくのことで美登里が、東横電車の祐天寺驛から降りて、上目黒五丁目の柳田家を尋ねると、すぐに分つた。柳田といふのが、どんな家であるか、そこで愼之助が、どんなことをしてゐるのか、青木も話さなかつたし、美登里も聞かなかつた。どこか勤め人の家に、書生さんでもして、勉強してゐるのだらうと、たゞ漠然と、さう考へてゐたのに、美登里は實際に、その屋敷の門の前に立つて見て驚いた。

宏大な屋敷である。嚴めしい門構への奥には、林か森のやうに、植込みが茂つてゐるし、洋館日本建と、お城のやうな宏壯な建物が、棟入り組ませて建てられてゐるのが、植込みの梢越しに、チラ／＼と隠見してゐた。とてもこんな立派な屋敷に、愼之助がゐるはずはないと思つた。或ひは、家を間違へたのではないかと思つて、門を入る前に引返して、一應たしかめて見たりした。

だが、青木が致へてくれた柳田といふのは、間違もなくこの屋敷で、青木先生はその家が華族だとも、何とも言はなかつたのに、伯爵家である。

いよくこの屋敷に、間違ひないことを確めて、再び嚴めしい門前に來た時、見れば見るほ

ど、あまりに堂々たるその建物に威壓でもされたやうに、美登里は立ちすくんでしまつた。意氣地もなく脚が慄へて、すぐには門の中に入れなかつた。

本當にこの屋敷に、愼之助がゐるものとすれば、いつの間にか愼之助は、自分などが、容易に接近することが出来ないやうな、偉い人になり、出世したやうな氣がした。そして不思議なことには、美登里はそれを喜ぶよりも、何んだか寂しく、心がなしく、手頼りなかつた。

こんな立派な屋敷にゐるよりも、下宿の狭くるしい部屋にでもゐるか、長家の間借りでもしてゐるはうが、美登里としては親しみがあると思つた。

内玄關に廻つて案内を乞ふと、召使が来て來た。愼之助の在否をたしかめると、ゐるといふ返事なので、

(まあ、よかつた。)

と思つて、ほつとした。——その瞬間、涙ぐましいほど嬉しかつた。そして、美登里は自分の來意を告げて、愼之助に會ひたいといふと、召使は、美登里の様子をしげ／＼と見て、何か訝かしさうにしてゐたが、さう言つてくるから、ちよつと待つてゐてほしいと言つて、引つ込んだ。

(あゝ、うれしい！)
と、美登里は思つた。

(やつと、會へるのだわ。)

この時を待つために、どんなに苦勞をしたことだらう!

美登里の頭には、この春以來のさまざまの苦しきかつたこと、辛かつたことの數々が、一瞬間、眼まぐるしく馳せめぐつた。が、考へて見ると、それは皆な夢のやうな氣がする。

たゞ、慎之助に會へるといふ喜びで、直きに胸が、いつばいになつてしまつた。眼は温かくうるみ、呼吸は弾み、そして幸福のために全身の血が、燃え立つやうに動揺した。

三

美登里は、内支關の土間に立つて、もう二十分以上も待つてゐるのに、取次ぎに引つ込んで行つた召使は、ナカ／＼出て來なかつた。

耳をすまして見ても、廣い建物の中は、どれだけ奥深いのか、わからなかつた。こんなに大きな屋敷では、定めて大勢の人がゐるだらうのに、空家のやうにしんとして、何の物音も聞えなかつた。

(どうしたのだらう?)

美登里は、だん／＼不安になつて來た。いつまでも、こんなことをして、待つてゐても、いいのだらうかと思つた。もう一度ベルでも押して、催促しなければ、召使が、忘れたのではないか

と思つた。

たしかに慎之助は、この屋敷にゐるのである。召使の様子では、留守といふことはないはずだ。

どんな忙しい仕事をしてゐるとしても、自分が斯うして訪ねて來たといふことが分れば、慎之助は何を措いても、すぐに飛んで出て來なければならぬはずである。それがこんなに待たせるといふのは、美登里にはその理由が解せなかつた。

(まだ、怒つてゐらつしやるのだらうか? でも、いくら怒つてゐるとしても、會はずにこのまま、いつまでも打つちやつておくといふ法はないわ。)

美登里は、不安の餘り、だん／＼じり／＼して來た。とつおいつ、いろ／＼なことを考へずにはゐられなかつた。

(あゝ、どうしたらいいだらう?)と、思つた。

(若し、慎之助さんが、まだ、ひどく怒つてゐらして、許して下さらないのだつたら、わたし、どうしたらいいのかしら? 死ぬよりほかないわ。)

希望を持ち、いろ／＼な楽しい空想を描いてゐたのに、今はそれどころではなく、心細くなつてしまつた。

——慎之助を見たら、行きなりその胸にすがり附いて、先づ思ふさま泣きたいと思つた。
(イヤ、初めて顔を見て、すぐに涙なんか見せては、イケないわ。)

それより先づ、ニツコリ笑つたはうがいい。そして、今までの苦心の數々を懇へて、許してもらふのだ。

(でも、わたし、とてもニツコリ出来さうもないわ。)

慎之助の顔を見たら、ニツコリするどころではなく、そのまゝわつと聲をあげて、泣いてしまひさうな氣がして、自分ながら心配だつた。

だが、泣くにも、笑ふにも、肝腎な慎之助は、いつまで待つても、出て來さうな氣配もない。(どうしたのかしら? もう一度、呼び鈴を押して見ようか。)

と、思つた時、奥のはうから、誰かが出てくるらしい氣配がしたので、美登里は思はずハツとして、胸がドキ／＼し、全身が固くなつた。

障子が開いて、美登里の眼の前に、ぱつと眼の覺めるやうな、派手な和服姿が現はれたのは、慎之助でもなければ、さつきの召使でもなかつた。似ても似つかない、美しい令嬢だつた。

美登里が、びつくりして、眼を見張つてゐると、令嬢は、先づじろりと、美登里の姿を一瞥してから、

『あなたなの? 宮内さんを訪ねて來た人は?』と、聞いた。

『えへ。』

美登里が、おづ／＼答へると、美津江は氣の毒さうに、

『駄目よ。』と、言つた。

『駄目と申しますと?』

『宮内さんは、あなたには、お會ひにならないのですつて。』

『まあ。』

美登里は、さつと顔色を變へると、大きく眼を見張つて、美津江の顔を仰いだ。——一度聞いたのでは、その言葉を信ずることが出来なかつた。

『本當よ。——會ふ必要がないからつて……さう言つてくれつて、わたし頼まれたの。』

『そんなはずはありません!』

美登里は、悲痛な調子で、必死になつて叫んだ。

『そんなはずがないと言つたつて……だつて宮内さんが、本當にさうおつしやるのですもの。』

『宮内さんが、きつと何か誤解してゐらつしやるんですわ。會へば分りますから……ちよつと會はせて下さい。ちよつとでもいいんです。』

『だつて、そんなことを、わたしに言つても、仕方がないわ。』

美津江は、當惑さうに眉をひそめた。——斯うして直接、美登里の姿を見ると、ちつとも反感など起らなかつた。かへつて、わざわざ訪ねて来たのと思ふと、氣の毒な氣がした。

『では、宮内さんは、奥にゐらつしやるのですか。』

美登里は、つとめて穩やかに聞いたけれども、今、奥にゐると言へば、すぐに上つて行きかねない様子だつた。

『さへ。』

美津江は、頭を掉つた。

『ぢや、どこにゐらつしやるでせう?』

『お出かけになりましたわ。』

『えつ。』

『あなたに會ひたくないからと言つて、お出かけになつたの。』

『まあ!』

美登里は、クラ／＼と眼が眩むやうな思ひで、思はずそこに昏倒しさうになつたのをじつと我慢した。

受難の日

美登里は、女のことである。會はないと言つて、出かけてしまつたといふものを、その上押しで、どうすることも出来なかつた。いつまでも美津江と、甲斐ない押し問答をしてゐるわけにもいかず、さうかといつて、慎之助が歸つて来るまで、人の家の玄關に、坐り込むわけにもいかない。仕方なく、心では泣きながら、一度は、歸るよりほかはなかつた。

(ひどいわ。ひどいわ。)

門を出ても、歩く氣力もなかつた。しばし、そこに佇ずんだまゝ、涙ながらに呟いて、唇を噛んだ。

約束を違へたのには、いろ／＼な事情があるのだから、會つて話をすれば、わからないはずはないと思つてゐた。話した上で、よく詫びようと思ひ、どんなに慎之助が怒つてゐるとしても、事情を話して、よく詫びたら、許してくれないことはないはずだと思つてゐた。

それなのに、わざわざ斯うして訪ねて見れば、頭から會ふ必要がないと言つて、追ひ歸してしまふ。

(あんまりだ！)

美登里は、口惜しさに慄へる唇を、きつと噛みしめずにはゐられなかつた。

(わたしのことなど、ちつとも、知らないで！)

知らないで、たゞ怒つてゐるのだと思ふと、口惜しくもあれば、心外でたまらなかつた。

(いえ、わたしは、このまゝでは歸れない！)

どうしても一度、慎之助に會つて、事情を話さなければならぬ。

しかし、再び屋敷に入つて行く勇氣はなかつた。

廣く取り繞らされてゐる塀の外を、ウロウロとウロついて見たり、佇ずんで見たりして、美登

里は、自分ではわからなかつたけれども、凡そ一時間近くの間を、さまよひゐるいてゐた。

秋の日は暮れ易く、まだ、四時を少し過ぎたばかりなのに、もう四邊には、夕暮れの色が漂ひ

始めてゐた。

(あつ！)

偶と見ると、向ふの角から曲つて来るのは、たしかに慎之助ではないか。二正のセファードを

鎖につないで、帽子も被らず少し俯垂れ氣味に、何か物思ひに耽つてゐるやうな様子で、力ない

足どりで、こつちに近づいて来るのは、紛れもない慎之助！そして別れてから今まで、美登里

が夢寐にも忘れたことのない、懐しい慎之助！

(慎之助さん。)

と叫んで、美登里は思はず自分のほうから、駆け寄らうとしたが、何か素直に、さうさせない

ものがあつた。

美登里は、咄嗟に、その電柱の蔭に、身をひそませるやうにした。そして、何も知らない慎

之助が、だん／＼近づいて来るのを、息を殺すやうにして、待つてゐた。

『慎之助さん！』

黙々としてゐるいてくる慎之助が、すぐ傍まで近づいて来ても、美登里は、さながら悪夢にで

も魔されるか、呪縛にでも逢つたやうに、容易には言葉もかけられず、身體も動かなかつた。

そのまゝ息を殺して、立ちすくんでゐると、慎之助は、何も氣が附かずに通りすぎようとする

ので、美登里は必死になつて呼ぶと、よろめきながら飛び出した。

二

『あつ。』

思ひがけなかつたので慎之助は、さつと顔色を變へると、凝然として立ちとまつた。そして、

仄ぐらい黄昏の光りの中に、瞳を定めて、しばらくは息も吐かずに、じつと美登里の顔を見つめ

てゐた。

『慎之助さん。あなたは、ひどいわ！ あんまりだわ。』

顔を見たからといって、美登里は何も直ぐに、こんな怨み言などを言ふつもりはなかつたのに、つい口を衝いて言葉が逆ばしるやうに出てしまふと、思はず涙がハラ／＼と、臉をあふれた。

『ひどいと言へば、どつちが、ひどいんだ！』

慎之助は、すこし蒼ざめた顔に、双の眼ばかりキラ／＼とかゞやかして、極度の怨恨と、憎悪とを籠めて、美登里の慄へてゐる可憐な顔を、ぐつと睨みつけた。——その眼ざしには、男の本當の憎しみと、深い情熱とが燃えてゐた。

『まあ。』

美登里は、すぐには何も辯解するどころではなく、涙に濡れた祈るやうな切ない眼をして、じつと慎之助の顔を見て、溜息を吐いた。

『僕は、君のやうな女には、用はない。——會ふ必要もなければ、口を利く必要もないから。』
息を弾ませ、胸を波打たせて言ふと、そのまゝ二疋の犬をつないだ鎖を引つ立てるやうにし

て、

『ラッター チェリー。——さあ、行くんだ。』

と、言つてそのまゝ、さつさへ行かうとした。

『宮内さん。』

美登里は、悲しみと、絶望のために、打ちひしがれたやうになつてゐたのが、ハツとして我に返ると、必死になつて後を追つかけた。

『待つて下さい。』

『……………』

だが、慎之助は、明らかに自分を呼び留めてゐる美登里の悲痛な聲が聞えてゐながら、振り返りもしなければ、立ちとまらうともしなかつた。

かへつて足を早めて、驅けるやうにして行く。

『宮内さん／＼。』

美登里は呼びながら、自分も足を早めて後を追うて、やうやく追ひ附くと、慎之助の袂を捕へた。

『ひどいわ／＼。わたしの話を聞きもしない中に、わたしを打つちやつておいて、行つてしまつては。』

それだけの怨みことを言ふのも、やうやくのことだつた。

あまりに冷酷な慎之助の態度に、怨めしく、かなしく、嗚咽が込み上げて来て、順序立てゝは何も言へない。

「僕は、もう美登里さんなんかと、口をきく必要はないからと、あれほど言つたぢやないか！」

「ひどいわ。」

「放して下さい。」

「放しません！」

「何をするんです！ 見つともないぢやないか。」

慎之助は、叱咤した。

「放したら、慎之助さんは、逃げ出すでせう？」

「放さないか！」

「わたしの言ふことを、どうぞ、よく聞いて……」

「聞く必要はないと、あれほど言つてゐるのに。」

「でも、わたしのはうでは、話さなければならぬのよ。どうしてもあなたに聞いてもらはなければならぬの！ どうぞ、わたしの話すことを聞いて。」

「へん！」

いくら人通りが少ないとはいつても、それでも勤め歸りらしい會社員や、附近の商人や、召使たちが、チラ、ホラ通る。さすがに、わざ／＼立ちとまつて見る者もなかつたけれども、でも、何事だらうといふやうに、好奇心に満ちた眼をして、チロ／＼見て行くので、慎之助は、それが辛かつた。若し、こんなところを、柳田家の召使の誰かにでも見られたら、それこそ醜態だと思ふと、気が氣ではなかつた。

自然と、言葉が荒らかに、態度も邪険になつてくるのを、どうすることも出来なかつた。

三

「ね、わたしの話すことを、どうぞ落着いて聞いて。」

事情さへ分れば、自づと慎之助の怒りも解けるはずだといふ自信があるので、美登里は、慎之助の着物の袖を、固くつかんだまゝ、必死になつて繰返した。——生懸命にすがりついて、血を絞るやうな哀願だつた。

「わたし、あなたに會ひたいばかりに、斯うして送る／＼出て来たんぢやありませんか。いろんな辛い思ひをして、酷い目にも逢はされて……でも、わたし、慎之助さんに逢ふのを、たつた一つの希望にも、手頼りにもして来たのよ。」

しかし、どんな悲しい想へも、悲痛な哀願も、頑な誤解と、深刻な憎悪のために、コチ／＼に固くなつてゐる慎之助の心を、柔らげることが出来なかつた。

「放せ！」

「……………」

「放さぬのか！」

「……………」

「憤い！」

叫んだかと思ふと慎之助は、無言のまゝいよ／＼力いつばいしがみ附いて来る美登里の手を、男の力に任せて振りもぎつた。一步あるき出したところを、

「待つて！」

と、今や美登里が夢中になつて、追従つて来るのを、

「何をする！」

一喝すると、犬の鎖を握つてゐない方の左の手で、どしんと突いた。

「あつ！」

と、叫ぶと美登里は、そこにへた／＼と崩れてしまつたが、どうしたのか上躰を土の上に俯伏

せ、両手で胸のあたりを抑へるやうにして、そのまゝ、容易のことでは、身うごきもしなかつた。

その間に慎之助は、さつさと歩いて行くと、柳田家の裏門のはうに、高い塚の角を曲つてしまつた。

格別ひどく突いたわけではなかつたが、美登里が追ひすがつて来るはずみと、慎之助が突いたのと、同時だつたのと、それに手の突き當つた場所が、生憎、乳の下のところ、急所だつた。

美登里は、さながら唐手の一撃でも喰つた時のやうに、しばらくは息も吐けず、もちろん、聲も出ず、身うごきも出来ず、さうして死んだやうに、路上の地べたに身をおいてゐた。――

崩れゆく虹

—

夕暮れのこと、人々の歩みは慌たゞしかつたし、それに裏通りのことで、人々の往き來は割合に疎らだつた。でも、若い男女が路上で何か諍つてゐるのを見ると、通りがかりの人々が、物珍らしさうに、立ちどまつてゐた。

一人立ちどまり、二人立ちどまりして、十人あまりも立ちどまつてゐたらうか？ 精しい事情

は、誰にもわからないにしても、しかし、慎之助の邪険で、亂暴な態度に、義憤を感じぬ者は、一人もなかつた。纖弱い若い女が、涙まで流して、何か懇へてゐるのに、暴力を揮つて、女を突き倒して置いて、後をも見ずに昂然と肩をそびやかすやうにして、堂々たる伯爵家の裏門から、すつと入つてしまつた。

『ひどい奴だ。』

『何者だらう？』

『この屋敷の書生か、何かだらう？』

『可哀さうに、女は、起き上ることも出来ないぢやないか。』

『怪我でもしたのか？』

『氣絶したらしろ。』

『何とかしてやらなくては。』

と、そこに集つてゐる人々は、ぼそ／＼と口々にさゝやき合つたが、しかし誰一人として、自分から進んで、介抱してやらうとする者はなかつた。

美登里は、冷たい路上に俯伏せになつて、死んだやうに伸びてゐるのであつたが、しかし死んでゐない證據には、呼吸する度に、華奢な肩先や、瘦せた背中が、傷々しく波打つてゐるので分

つた。

すると、一人の立派な青年紳士が、つかつかと進み出ると、俯伏せになつてゐる美登里の上に身をかがめて、やさしくその肩に手を掛け、

『苦しいですか？』

と、聞いた。

『……………』

美登里は、誰だか知らないけれども、やさしく聞いてくれる人になりたいして、返事をしなければわるいと思つたけれども、何も言へなかつた。——そんなにひどく突かれたとは思はないのに、左の乳の下が痛んで、身動きすることも出来なかつた。

『お歸りになるんでしたら、僕の自動車で、送つて行つてあげますが。』

『……………』

『それとも、お醫者のところに、連れて行つてあげませうか。』

『……………』

何を聞いても、美登里が返事をしないので、青年紳士は照れくさうに、苦笑をすると、好奇心に満ちて佇ずんでゐる人々の顔を、

(どうしたらいいのでせう?)

と、問ひかけるやうな眼ざしをして、チラと見廻した。

その紳士は、清水だつた。

清水は、その後も根氣よく、何の彼のといつては、美津江を訪問して来るのであつたが、ちやうどその時も、彼女を音楽會に誘ふつもりで出かけて来た。

この頃買つたばかりの、ファイアットのクーペを、自分で運轉して、ちやうど、屋敷の曲り角のところまで来た時、そこから十五六メートル離れた裏門の近くに、人だかりがしてゐるのが、偶と眼に附いた。

(何だらう?)

柳田家の裏門の近くなので、清水が疑問を起したのは、當然だつた。

でも清水は、しばらくの間は、自動車から降りようとはせず、様子を見てゐるだけだつたが、何か男と女とが、争つてゐるらしいことは分つた。

が、よく見ると、男は、自分の戀敵の宮内ではないか。

慎之助のはうでは兎も角も、清水自身は、宮内を戀敵だとはかり、思ひ込んでゐるのである。

美津江が、自分のプロポーズに承諾を興へてくれないのも、宮内がゐるからである。だから清水

に取つて慎之助は、全く邪魔者だつた。

心では切かに、犬に喰はれてしまへばいいくらゐに思つてゐる慎之助である。その慎之助が、様子あり氣に、若い、美しい女と何か争つてゐる。

清水は、急いで自動車から飛び降りると、そつと身を忍ばせるやうにして、その場に近づいて行つた。

が、慎之助のはうでは、清水に見られてゐることなどに、氣が附くはずはなかつたし、清水がその場に近づいて、立ち群がつてゐる人々の間に紛れ込んだ時には、慎之助は、すがり附いて來る美登里を突き飛ばしておいて、さつさと二疋の犬を連れて、裏門を入つてしまつた。

二

「早く、お醫者のところに、連れて行つて上げたほうがいいね。氣の毒に。口もきけないんですよ。」

人々の中に、既に六十歳くらゐのお婆さんが交つてゐた。——お婆さんは、青年紳士の深切に、感激したのだらう。二足三足すゝみ出ると、鼻をすゝり上げるやうにして言つた。

「ちや、誰か、手傳つてくれませんか……!」

清水は、お婆さんの言葉に、自信を得たやうに言つた。

『僕の自動車まで、この人を抱へて、連れて行つて上げたいと思ふんですが……どうぞ、手を貸して下さい。』

さう言はれると、會社から歸りらしい中年のサラリー・マンらしい男や、食料品屋のご用聞きらしい男などが、四五人も飛び出して來た。

『どうも、有難う〜。』

と、清水は自分では手出しもせず、しかし自分のことでもあるやうに、頭を下げてゐる中に、ぐつたりしてゐる美登里の身體を、人々は自動車まで運んで、片側のはうに乗せてゐた。

『どうも、すみません。』

美登里は、かすかに眼をあけて、低い聲で言つた。

醫者などに連れて行かれては、困ると思つたし、自動車から降りして、このまゝ打つちやつておいてほしいと思つたが、口が利けなかつた。

清水は、美登里を乗せたまゝ、凡そ十五六分間ばかりも、自動車を運轉してゐたが、或る醫院を見つけると、その前に停めて、自分が先に降りた。

その時には、美登里は、かなり元氣を回復してゐた。

『さあ、僕が負ぶつてあげますから、肩に擔まりなさい。』

清水がさう言つて、背中を向けると、美登里は緩くなつて、

『いんですの。』

と、かすかに言つた。

『一人で、歩けるんですか。』

『……』

美登里は、だまつて俯首れてゐた。

『遠慮しなくなつて、いいんですよ。僕に、負ぶさつたら、どうですか。』

『わたし……お醫者さまに、診ていただかなかつて、いいんですわ。』

美登里は、金のことが心配だつた。

——青木が貸してくれた金は、今や残り少なくなつてゐる。若し、多額の診察料や、薬價などを請求されたら、どうして支拂つたらいいか、わからない。

——左の乳の下の痛みは、自分でも氣になつたけれども、でも、金のことでは恥をかくのは、怖ろしかつた。

『どうして?』

清水は、不思議さうに眼を見張つて、美登里の顔を見た。

美しい顔が蒼ざめて、うるんだやうな腫が、一生懸命に微笑まうとして、努力してゐるのであつたが、かへつて、その眼は泣くやうに、慄へてゐる。

『……………』

（どうして？）と聞かれても、答へることが出来なかつた。

『なぜ、醫者に診てもらはなくても、いいんですか？』

と、重ねて聞かれると、美登里は仕方がなく、

『でも、わたし、もう大丈夫ですから……………』

と、やうやく答へたけれども、背筋や、腋の下には、恥かしさのために、冷たい汗がにじんでゐた。

『大丈夫でも…………しかし念のために、一應診察を受けておいたほうが、いいですから。』

と言つて清水は、氣のすままない美登里を、無理に勵まし、手を取つて、醫院の玄関に入つて行つた。

醫者は、在宅してゐた。

一應、事情を聞いてから、診察にかゝつたが、ナカ／＼丁寧に診察してくれた上、醫者は更に、

『べつに、何でもないやうですが…………しかし、念のために、レントゲンで見せてみませう。』と、言つた。

『あら、いいんですわ。レントゲンなんかで見ていたどかなくても。』

美登里は、あわてゝ、今にも、泣き出さんばかりの顔をして、哀願でもするやうに言つたが、しかし、傍に付き添つてゐた清水は、無造作に、

『さうですな。やつぱりレントゲンで、見てもらつたほうが、いいですな、そのほうが、安心出来るですよ。』

と、人の氣も知らずに、醫者に頼んでしまつた。

三

レントゲンで見た結果も、やつぱり、どこにも異状はなかつた。

『突かれたはずみに、筋でも違へたのかも知れませんが。』

醫者は、さう言つてくれたので、それで身體のはうは、安心だつたけれども、美登里としては、安心の出来ないのは、支拂ひのことだつた。

醫者の處置としては、何か塗布劑を塗つてくれたし、内服薬も二日分だけ、調合してくれた。だが、會計書を見ると、診察料から、レントゲン料、處置料、それに薬價と、十圓を越えてゐ

るではないか。

そんな金が、美登里に持ち合せがあるはずはない。

美登里は、今にも泣き出しさうな顔をして、會計口のところに、ぼんやり突つ立つてゐた。會計書を持つた手が、ブルブルと、かすかに慄へてゐた。

そこへ、後から出て来た清水が、その様子を見ると、訝かしさうに、つかくくと近づいて来て、

『どうしたんですか？』

と、何も気が附かずに、暢氣らしく聞くのであつた。

『……………』

美登里は、返事も出来ずに、立ちすくんでゐた。

『また、どこか、気分でも、わるくなつたんですか？』

『さへ。』

『ぢや、どうしたんです？』

と聞かれて、美登里は今や、絶體絶命だつた。

『あの、これを……………』

と言ひかけたまゝ、後をつゞけることが出来なかつた。眞蒼だつた顔が、急に燃えるやうに、眞赤になつて、ブル／＼慄へてゐる指先につまんでゐる會計書の紙片を、おづ／＼と、清水の前に差出した。

『あつ、それですか。』

清水は、美登里が皆まで言はなくても、すぐに察してくれて、手早く會計書を受取ると、

『どうも、うつかりしてゐて、失禮しました。すみません。』

と、如才なく謝つて、すぐに紙入を取出すと、十圓紙幣を二枚抜き出して、支拂つてくれた。そのテキパキした動作や、無造作な態度は、實に洗煉されてゐて、美登里には氣持がよかつた。自分に恥をかゝさせまいとして、庇つてくれるのが嬉しかつた。そして、何より恥から救はれたことが、美登里としてはありがたく、心の中では手を合せるやうな思ひだつた。

『わたくしこそ、本當にすみません。どうも有難うございました。』

美登里は涙ぐんで、小聲で言つて、心から頭を下げた。

『イヤ、これくらゐのことは、何でもないことですから。』

清水は、相手に氣兼ねをさせないためだらう。わざと無造作に言つて、おど／＼してゐる美登里の神経を効はるやうに、ニツコリして見せた。

『それでは、これから、どちらにいらつしやいますか。』

清水は、美登里を助けて、自動車に乗せると、自分は並んで腰を降ろして、ハンドルを把りながら言った。

『……………』

美登里には、行くべきところは、どこにもなかった。

今まで、前方に描いて、それに近づくことばかりを焦つてゐた美しい虹は、近づいて見ると同時に、無慙にも崩れ果てゝしまつたのである。——折角、唯一の當てにもすれば、頼りにもし、たつた一つの希望の星として、遙るく尋ねて来たのに、やうやくのことで逢つたと思へば、思ひもかけず愼之助は、あの通りの態度である。美登里が嘗めつくして来た苦勞や、辛酸など、すこしも察してくれようとしなければかりか、頭から裏切り者と罵つて、一言の辨解すら、聞いてくれようとしなない。

剩へ纖弱い女を暴力で、突き飛ばしておいて、起き上がることが出来ないでゐるものを、振りかへりもせずに、さつさとして行つてしまつたのである。

——逢ひさへすれば、豁然として氣も心も晴れて、必ず自分を信じてくれるとばかり思ひ込んでゐたのは、まったく自分の誤まりであつたといふことを、美登里は今になつて、ハツキリと眼

が覺めたやうに、初めて覺らずにはゐられなかつた。

(男ごころといふものは、あゝしたものなのか！)

美登里は、つく／＼と身を以て、痛いほど味ひ知つた。だが、今となつては、

(どこへ行く?)

と、聞かれても、行くべき當てもない身のかなしさ！

美登里は、涙ぐんだ眼をして、言葉もなく、力なく差し脣向いて、ホツとかすかな溜息を吐くよりほかなかつた。

『さうですか。』

清水は、美登里の涙ぐんだ眼を、ちよつとの間、じつと見まもつてゐた。が、何かを覺つたやうに、さう言つて、獨りぞうなづいたが、

『では、僕のところに、いらして下さい。いいですね。』

と言ふと、ギヤを入れて、自動車は動き出した。

『でも、わたし……それでは、困りますから。』

美登里が、すこしあわてたやうに、遠慮ぶかく言ふと、

『いいですよ、遠慮しなくたって。大いに歓迎しますから。』
清水は笑ひながら言ふなり、急にスピードを出した。
美登里は、どこに連れて行かれるのか、何もわからなかつたけれども、清水が言ふまゝに任せ
るよりほか、この場合どうすることも出来なかつた。

華麗な夢

美登里は、恰も夢に夢見る心地で、わが身の運命を、わが身で、不思議に思ふばかりだつた。
——どういふわけで慎之助が、あんな宏荘で、立派な屋敷にゐるのか？ その理由は分らな
つたけれども、美登里自身も、今は壯麗な御殿のやうな屋敷の華美な一室に、お伽噺のお姫さま
か何かのやうに、澤山の侍女にかしづかれて、下にもおかぬやうな待遇を受けてゐるのである。
ぐつすり眠つたが、怖ろしい夢にでも悩めたやうに、ハツとして眼をさまして見ると、いつも
の佗しい部屋ではなく、宮殿の中の華麗な一室のやうに、善美を盡した部屋に、古風な天蓋のあ
るベッドの上に横はつてゐるのであつた。

もう日は高くなつてゐるのだらう。高貴な織りものが、幾重にもだらりと垂れ下つてゐるカー

テンの間隙から、黄金色をした日光が、チラ／＼と射し込んで、厚ぼつたい、華やかな模様への
ルシヤ絨毯や、豪華な器具や、調度を、夢のやうに、ほのかに見せてゐる。
フカ／＼と、軽い羽根枕に、頭を埋めるやうにして、微妙なスプリングの弾力を持つてゐる寝
臺は、まるで雲の上にも横はつてゐるやう。

(どうしたのかしら?)

と、美登里は、さながら夢の中にでもゐるやうな氣持で、あたりを見廻すと、獨りでつぶや
いた。

(どうして、わたしは、こんな立派な部屋にゐるのだらう?)

すつかり忘れてゐたのだが、直ぐに美登里は、昨日のすべてのことを、マザ／＼と思ひ出し
た。

(わたし、こんなことをしては、ゐられないのだわ。)

あわてゝ、頭をもたげて見たが、さて、どうしたらいいのか?

起き出して行くにも、着換へるべき着物は、どこにおいてあるのか分らないし、どこへ行けば
いいのか分らない。

耳をすまして見ても、広い屋敷の中はしんとして、何の物音も聞えず、まるで森の中の古城に

でも、たつた一人ぼつちであるやうな工合。

自動車に乗せられて、三十分近くも走つたと思ふ頃、まだ東京馴れない美登里には、それが何といふ町だか、どこだか分らなかつたけれども、とにかく、長い／＼塀ばかりつゞいてゐる、しづかな屋敷町に出て、自動車は大きな門の中に、する／＼と滑り込んだ。

玄関から上つたけれども、誰にも會はなくてよかつた。

たゞ、召使らしい女が、三四人も出て来て、うや／＼しく迎へてくれると、清水の指圖で、この二階の二間つゞきの部屋に、案内されたのである。

美登里は、気分もすぐれなかつたし、それに、ひどく疲れ切つてゐたので、晚餐の食堂にも降りず、風呂も断つて、ビジャマに着換へると、次ぎの部屋の寢室に入り、ベッドに上つて、横になつたかと思ふと、間もなく眠つてしまつた。

今、眼がさめるまで、その後のことは、何も知らない。

とにかく、自分一人で、ビジャマのまゝで、のこ／＼起き出して行くわけにいかないことは、わかつてゐた。美登里は、誰かに来てもらひたいと思つたが、さて、どうして呼んだらいいのか、分らなかつた。あたりを見まはしても、呼び鈴らしいものは、見當らない。

ベッドの上に起き上つたまゝ、ウロ／＼してゐると、偶と頭上に、絹糸の房の附いた太い紐

が、だらりと垂れ下つてゐるのが、眼に附いた。

(これかしら?)

と思つて、美登里が試みに引つ張つて見ると、どこか遠くのはうで、鈴の鳴る音が、カラ／＼、カラ／＼と、かすかに／＼聞えて来た。

と思つたら間もなく、しとやかに、誰かど部屋に近づいて来る氣配がして、部屋の前に立ち留り、コツ、コツと、かすかにノツクの音が聞えた。

『どうぞ。』

待ちかねてゐた美登里が言ふと、ドアが開いて、一人の召使が、しづかに入つて来ると、ベッドに近づいて来た。昨夜、見覚えのある顔だったので、美登里は、すぐに親しみを感じて、

『わたし、起きたいの。』

と、言つた。

『はよ。』

召使は答へると、部屋の窓々のカーテンを、引いて廻つた。

明るい外光が、一時にサツと流れ込んで来たので、今まで、仄ぐらさに馴れてゐた美登里の眼には、眩しかつた。

「わたしの着物は？」

と、聞くと、

「はう。」

と答へて、召使は衣裳戸棚から、美登里の見たこともないやうな、錦紗の着物を取り出して来た。

それを見たばかりでも、美登里は憎えたやうに、

「まあ。」

と言つて、眼を見張り、深く息を呑んだが、

「わたしの着物よ。」

と、言つたまゝ、手を觸れようとしなかつた。

「どうぞ、これをお召し下さいますやうに……」

さう言つて召使は、うやくしく、その錦紗の着物を捧げてゐる。

「でも……」

「どうぞ。」

「だつて、これは——こんな立派な着物は、わたしのではないんですもの。わたしの着物を出し

よ。」

「これが、あなたさまのお召し物でございますから。」

「誰が、さう言ふの？」

「若さまが。」

「まあ。」

「どうぞ、お召し換へあそばせ。——わたくしが、お手傳ひいたしますから。」

「いいの。わたし一人で、着換へますから、いいの。」

「でも、わたくし、若さまから、言ひつけられてゐますから。」

召使は、辭退する美登里に、無理にすゝめて、自分で手傳つて、その着物を、着せてくれた。

着物ばかりではなく、何から何まで、ちやんと取揃へてあつた。襦袢から、足袋から、細紐か

ら、ハンカチーフのやうなものまで、すっかり揃つてゐるのには、美登里は、びつくりしてしまつた。

二

美登里は、さながら龍宮にでも連れて來られてゐるやうな氣持だつた。——高い天井の、いかにも清潔な感じの、廣々とした食堂に案内されて、たつた自分一人のために、二人もの召使が附

き切りで、朝の食事をすました。

再び、自分に當てられた部屋に歸つて來たけれども、美登里は、どうしても氣が落着かなかつた。

召使は、流行雑誌だの、婦人雑誌だの、映畫雑誌だのを、幾冊も持つて來てくれたけれども、しかし美登里としては、それを讀むどころではなかつた。

(どうしたら、いいのだらう？ どうなるのだらう？)

青木先生のことや、故郷の父や、義母のことや、それから新婚旅行の途中から、捨てゝ來てしまつた利一郎のことが、取りとめもなく思ひ出された。今迄は、愼之助に逢ひたいばかりの一心で、あまり思ひ出すこともなかつた人々のことが、今は一時に、思ひ出されるのであつた。(もう一度、宮内さんに會つて、よく話して見たら、きつと、分つて下さらないはずはないと思ふけれども。)

未練らしく、そんなことも思つて見た。が、昨日の愼之助のあの邪慳な態度を思ひ出すと、恐ろしかつた。——二度と自分一人では、會ひにゆく勇氣はなく、考へたゞけでも、身慄ひがした。

(やつぱり、青木先生にお會ひして、ご相談でもして見るよりほかには、仕方がないのだわ。)

さうは思つても、この上青木先生を煩はすのは、忍びないやうな氣がした。——それも、東京にでもゐるのならば、すぐに飛んで行つて、相談するといふこともあるけれども、折角あゝして、大島に行つて、畫を描いてゐるところである。藝術にたいする精進を、自分の戀愛のために邪魔するのは、あまりに心なき業のやうな氣がして、青木先生は、いくらあゝ深切に言つてはくれても、美登里としては、この上、その深切に甘えることは、どうしても出來ないやうな氣がした。

さうかといつて、このまゝ、おめくくと故郷に歸つて行くことなどは、猶更、出來ないことである。何の面目があつて、再び故郷などへ歸つて行かれるだらう！

(死んでも！)

と、美登里は、唇を噛みしめるやうにして、口に出して呟いた。

(さう！ ほんたうにわたしは、死んでもこのまゝでは、故郷になど歸つては行かれないのだわ。)

それは豫て、決つてゐることでもあるし、美登里自身としても、覺悟をしてゐることである。

それにもかゝはらず、改めてさう考へて見ると、美登里は急に、自分の世界が、狭くなつたやうに、心ぼそく、かなしい氣がした。

いろいろに考へた末、美登里は、やつぱり當分は自分一人で、東京で何か自活の方法でも見付けて、働くよりほかにないことが分つた。

さう心が決まると、一刻もこんなところに、こんなことをして、ぐづぐづしてゐるどころではなかつた。

早く、こゝから出て、職業紹介所にも行つて、何か適當な仕事の口を、見つけなければならぬ。

矢も盾もたまらなく、美登里は、また例の絹紐の房を引いて、鈴を鳴らすと、召使を呼んだ。

『わたし、早く出かけたいんですけれども……』

と、美登里が苛々して言ふと、召使は當惑さうに、

『でも、若旦那さまが、こゝにゐて頂くやうにと、固くさうおつしやつてゐらつしやいますのですが。』

と言つて、眉をひそめた。

『でも、わたし、行かなければならないのですから。』

『どちらへ、行らつしやいますのでせうか？』

と聞かれて、美登里は、

「……………」

咄嗟には、答へられなかつた。

『何ならお自動車の支度を、させますですが……』

『いゝえ。——自動車なんか、そんなものはいいの。』

『ですが……』

『ぢや、わたしがお會ひして、話をいたしますわ。』

『はあ。』

『ですから、あの方に、早く會はせて頂きたいの。』

昨夜から清水には、まだ一度も會はないのである。

美登里は、こゝから出て行くにしても、一應清水に會つて、お禮も述べなければならぬし、立替てもらつた金のことも、よく事情を話して、しばらく待つて貰はなければならぬと思つた。

『若旦那さまでございますか？』

と、召使に聞き返されて、美登里は、

「えい。」

と、うなづいた。

『若旦那さまは、まだ、お眼覚めになつてゐらつしやいませんですが。』
『まあ。』

美登里は、時計を見ると、既に十二時近くだつた。

『いつでも、何時頃には、お眼ざめになりますの？』
と、聞くと、

『さやうでございますね。二時か三時頃には、大抵、お眼ざにめなるのでございますけれども。』
といふ返事に、美登里は、

『まあ。』

と、再び言つた切り、啞然としてしまつた。

三

『やあ。』

無造作にノックをして、部屋に入つて來ると、清水は、眼を見張るやうにして、ニコ／＼と、
『きれいですな。——やつぱり、その着物は、よく似合ふ。』

と、機嫌よく、うれしさうに、美登里の姿を、じろ／＼と見入りながら、無遠慮に言つた。

美登里は、じろ／＼しながら待つてゐたのであつたが、もう三時は、疾づくに過ぎてゐた。

『いろ／＼、お世話さまになりましたけれども……』

美登里が、言はうとするのを、清水は引取つて、

『早くこゝから、出て行きたいと言ふのでせう？』

と言つて、笑つた。

『ええ。』

美登里は、うなづくと、

『いろ／＼、事情があるものですから……わたし、早く、行かなければなりませんの。』
と、言つた。

『何も、そんなに慌てゝ、出て行くことはないのですよ。』

清水は、ニコ／＼笑ひながら、無造作に言つた。

『でも、わたし、何か働かなければなりませんから。』

『働く？』

『ええ。』

『事情を、話してくれませんか。』

「……………」

美登里は、すぐには話せることでもなかつたし、清水に話したところで、どうなることでもないので、口をつぐんで、低く俯首れてゐた。

「あなたは、こゝに緩くりしてゐたらいと思ふな。」

「でも、さういふわけには、いきませんわ。」

「宮内君には、もう會はなくなつて、いいんですか？」

「えつ。」

「僕が、會へるやうにして上げますから、こゝに、緩つくりしてゐたら、いいぢやありませんか。」

「あなたは、宮内さんを知つてゐらつしやいますの？」

不思議さうに、美登里が聞くと、清水は軽く頷いて、

「よく知つてゐるんです。ですから、僕が、その中に宮内君に、會へるやうにして上げませう。」と、さも自信あり氣に言つた。

「本當ですか？」

急に美登里の眼はかどやき、顔色が明るくなつた。

「現金ですな。ははゝゝゝ。」

と、清水は笑つた。

「あら。」

我れにもなく美登里は、ぱつと顔が火照つた。

「あなたは、宮内君を、愛してゐるんでせう？」

と、聞かれても、美登里は、いよゝゝ赧くなるばかりで、

「……………」

答へることが出来なかつた。

「だが、宮内君は、すゐぶん酷いですな。今では、あの柳田伯爵家の令嬢と、愛し合つてゐるんですから。」

と、清水は忌まゝしさうに言つたが、美登里は、胸に五寸釘でも打ち込まれるやうな氣がした。

男の良心

泣き聲を振り絞るやうにして、哀願するものを、力いっぱい突き飛ばしておいて、後をも見ずに、屋敷の中に入ってしまったものゝ、しかし慎之助は、それでサツパリした氣持ではなかつた。

苦い後味が、いつまでもくびり附いたやうに残つて、ナカナカ消えなかつた。二疋の犬を犬舎につないで、自分の部屋に上つて來ても、何をやる元氣もなかつた。夜學に通はなければならぬ時間が來ても、物忘れでもしたやうに、ぼんやりテーブルに凭つて、何か考へ込んでゐた。

（あんなことをして……あれでは、餘り残酷だつたかも知れない。路の上に倒れたまゝ、何だか泣いてゐたやうだつたが……）

どこか、怪我でもしなかつたかしら？と思ひ、見知らない東京に出て來て、たつた一人で、どうしてゐるだらう？と思ふと、傷ましい氣がした。

が、すぐに慎之助は、自分の同情や、氣の弱さを、はげしく反撥せずにはゐられなかつた。

（たつた一人だなんて、そんなことが分るものか！）
と、腹立たしさうに呟いた。

（あれでいいのだ！イヤ、あれだけのことで、まだ物足りない。もつとく言つてやるべき

であつた。もつとく打つても、蹴つても、まだ嫌らないのだ。裏切られた男の怨みが、どんなに深いものかといふことを、思ひ知らしてやるべきだつたのに！自分のはうから、逃げるやうにして、屋敷に入つて來てしまつたのは、残念だつた。もつとく思ふ存分に、罵つてやればよかつた。せめて暴力に訴へても、ひどい目に逢はせてやるべきだつた。）

と、齒をギリ／＼と噛み鳴らすやうにして、心で怒つてゐた。

誓ひを破り、約束に反かれたことを考へると、飽まで烈しい憎惡を感じ、怨みの感情は、焔のやうになつて、胸を焦がすのであつたが、しかし、人を憎んだり、怨んだりする感情といふものは、決して愉快なものではない。

背筋や、腋の下には、冷たい膏汗がにじみ、頭のしんが、ツキンツキンと痛んで、今にも昏倒するのではないかと思はれるほど、氣分がわるく、イスに腰掛けてゐるのに、フラ／＼してゐた。

慎之助は、たうとうその日は、夜學に行くのも休んでしまつたし、晩の食事にも、降りて行かなかつた。

召使が、食事を知らせに來た時にも、慎之助は、

『氣分がわるいから。』

と、たゞ簡単に、さう言つた切りだつたが、美津江は心配して、女中に様子を聞きに來させた。

『大したことはないのです。すこし、気分がわるいだけですから……明日になれば、さつぱりすると思ひますから、どうぞ、心配なんかなさらないやうに、よく、さうおつしやつて下さい。』
美津江は、自分が直接、慎之助の部屋に來るわけにはいかないので、それには父や義母がヤカましいので、わざ／＼自分附きの召使を來させたのであるが、そんなことも慎之助には面倒くさく、煩はしい限りで、つく／＼イヤになつた。

二

その夜、慎之助は、早めにベッドに上つたけれども、ナカ／＼寝つかれなかつた。いろ／＼なことが、それからそれへと考へられて、ナカ／＼眠るどころではなかつた。十時を打つのを聞き、十一時を打つのを聞いてから、また、再び跳ね起きて、ベッドから降りてしまつた。その時には慎之助は、容易ならぬ決心をしてゐた。

(さうだ！ それより他はない。さうすることが一番だ。)

ベッドから降りてからも、テーブルに凭つて、しばらく考へてゐたが、一度固めた決心は、容易に動くべくもなかつた。ます／＼固くなるばかりだつた。

それは、この屋敷から、出て行くといふことだつた。

初めからこんな屋敷にゐて、こんな待遇を受ける氣持など、微塵もなかつたのだ。たゞ、偶然の運命と、美津江の並々ならぬ同情とに依つて、現在の極樂のやうに恵まれた境遇が與へられたのであつて、考へて見れば、自分の眞の實力といふやうなものは、まつたく無關係に、たゞ／＼人の情けの恩恵と言はなければならぬ。

(この恩恵に、いつまでも、甘えてゐてはならない！)

猛然として慎之助のこゝろに、強い反撥心が起つた。

殊に、警戒しなければならぬのは、自分になりたいして動いて來てゐる令嬢の氣持だつた。

(こんなことをして、いつまでも愚圖々々してゐる中には、遂ひに抜き差しのないやうなハメに、陥ち込んでしまはないとも限らないのだから。)

自分としては、十分に警戒はしてゐても、さう思ふと、身ぶるひするほど恐ろしい氣がした。

一途な慎之助の性質として、氣が附いた以上、一日も、じつとしてはゐられなかつた。もちろん、欣一にたいしても氣の毒だと思ふし、美津江にたいしても、甚だすまないと思ふ。

だからといつて、ぐ／＼してゐて、抜き差しのならないハメに陥ち込んで、一生を束縛されてしまふよりも、今の中に、さつぱりと、この屋敷から出て行くのが、正しい道だと思つた。

正面から切り出したところで、美津江や欣一が、快く許してくれるとは思へなかつた。殊に欣一は、愼之助が勉強の面倒を見るやうになつてから、學校の成績が、ぐつと上つてゐた。そればかりではなく、勉強そのものが好きになつて、自分でナカ／＼熱心だつたし、愼之助にたいしては、家庭教師といふよりも、まるで兄にでもたいするやうに、よく懐いてゐた。その點では、伯爵でも、氣むづかしい夫人でも、愼之助を認めてゐたし、やつぱり正面から暇をくれと言つたのでは、とても許してくれないことは分つてゐた。だから愼之助は、よく／＼考へた上で、このまゝ無斷で、そつと逃げ出すよりほかはないと思つた。

逃げ出す以上は、一日も早いほうがいいし——ちやうと思ひ立つた今夜こそ、決行すべきであると、さつきから決心してゐるのであつた。

三

いざ出て行くことに決心しても、しかし愼之助としては、何の未練もなかつたし、もと／＼身一つで、この屋敷に來たのだから、支度をと／＼のへるほどのこともなかつた。すべては、この屋敷で貸してくれてゐるものか、でなければ、愼之助のために、新しくと／＼のへてくれたものである。が、愼之助としては、そんなものを、一々持つて出て行くつもりはなかつた。

たゞ、欣一だけが、何だか可哀さうな氣がしたし、自分がゐなくなつたことを知つたら、どんなに驚きもし、かなしむか知れないと思ふと、胸が痛んだ。もう一度會ひたい氣もしたが、しかし、そんなことをしてはゐられなかつた。

一刻も早く、人知れず、こつそりと抜け出して行かなければならない！ さう思つて手早く、その邊を片附けたり、身支度を整へたりした。

思ふところがあつて、無斷にてお暇を頂き、こゝから出て行きます。長々のご厚意にたいして、甚だ忘恩の行ひのやうであります。これにはいろ／＼と、私一個の事情のあることですから、どうぞお許し下さい。そして、決して私の行方などはお探し下されませんやうに！ お忘れ下さい。

長い間のご厚情と、厚いお世話を受けましたことを、くれ／＼も深くお禮申上します。

一片の紙に、ペンの走り書きだつた。名宛を書かうかと思つたけれども、ちよつと考へてから止した。が、愼之助のつもりでは、美津江に當てゝ、書いたのであるし、名宛は書いておかなくても、美津江がこれを読んだら、自分に當てゝ書かれた氣持は、分るはずだと思つた。

テエブルの上に、すぐ眼に附くやうに、擴げたまゝにしておいて、風で飛ばぬやうに、文鎮で押へた。小さな青銅のスフィックスで、それは、いつか美津江が買つて來てくれたものだつた。

いつの間に、こんなに時が経つたのか、時計が、二つ打つ音が聞えた。
慎之助は、ドアを開けると、そつと足音を忍ばせて、階段を降りて行つた――

處女の夢

風呂敷包みを、たつた一つ小脇に抱へて、木戸を開けたところを、
『ちよつと。』

と、呼び止められて、慎之助はギクリとして、立ち留つた。

『えつ。』

と、振りかへると、仄暗がりの植木の木蔭に、息を弾ませて立つてゐるのは、美津江ではないか。

『あなたは！』

慎之助は、びつくりして眼を見張つた切り、しばしは言ふべき言葉も忘れたやうに、マジックと令嬢の顔を、透かすやうにして、見つめてゐた。

『どこへ行くの？』

と、聞いて美津江は、一步慎之助に寄り添つたが、その時、双の脛が、涙にうるんで來るのを、どうすることも出来なかつた。

『……………』

慎之助は、咄嗟には、答へることが出来なかつた。

『ねえ？』

美津江は、ハラ／＼と溢れる涙を、拭はうともせず、

『こんな時分から、どこへ行らつしやるの？』

と、慄へる聲に、怨みを籠めて、更に聞くと、そのまゝ（わつ。）と、泣きくづれようとするのを、じつと我慢してゐた。

『……………』

『ご返事が出來ないのね。』

『……………』

『今時分から、どこへも行らつしやる場所は、ないはずだわ。』

『……………』

『さ、歸りませう。』

『あなたこそ、歸つて下さる。』

『一緒でなくては、イヤですわ。』

『……………』

『それとも、あなたは、どうしても出て行くつもりなの？』

『……………』

『あなたは、こゝにゐるのが、そんなにお厭なの？』

『さういふわけではありませんが……イヤだなんて……そんなことはありませんが。』

と、慎之助は低く、掠れたやうな聲で、口籠り／＼言つた。

『ぢや、なぜ、黙つて出て行くの？』

『……………』

『わたしが、お留めしなければ、このまゝ無断で、どこかへ行つておしまひになるところだつたのでせう？』

『……………』

『ひどいわ。』

と言ふと美津江は、華奢な肩先を慄はせて、さめ／＼と泣いた。

『すみません。』

と、慎之助は、頭を下げた。――斯うして正面から怨まれたり、掻き口説かれて見ると、さすがに慎之助は、哀れを催ほさずにはゐられなかつた。

『謝つてもらはなくてもいいの。』

『ですが、お嬢さんや、欣一君には、すまないと思ひます。』

『あなたが、こんな工合にして出て行つたら、わたしは後で、どうなると思つてゐらつしやるの？』

『……………』

『宮内さんには、わたしの心が、お分りにならないの？』

『……………』

『あなたは、そんなにわたしが、お嫌ひなの？』

と言ふと美津江は、涙に濡れた瞳で、じつと慎之助を見上げた。

月はなく、星の光りも見えず、空の眞暗な夜だつた。

でも、その木戸の向ふに、ほのかな街燈の光りが照つてゐるので、美津江の蒼白い顔の色が、まるで大きな梔子の花のやうに見えた。

「……………」
慎之助は、眩しさうにまたよきして、顔を背けた。

「嫌ひなら嫌ひだと、ハッキリ言つて頂きたいわ。」

「……………」

「ねえ、黙つてばかりゐないで、何とか返事をして。」

「嫌ひではありませんが……………」

「ぢや、どうして出て行くの？」

「……………」

「何か、屋敷の中に、お氣に召さないことでもあるの？」

「……………」

慎之助は、(飛んでもない!)といふやうな表情をして、頭を掉つて見せた。

「それなら何も無断で、屋敷から逃げ出して行かなくなつて、いいぢやないの？」

「ですが、僕は、こんなことをして、いつまでも、愚圖々々してはゐられないのですから……………」

「ぢや、屋敷を出て、どうしようといふおつもり？」

「……………」

「どういふ方針なの？」

「べつに、方針なんかありませんが。」

と言つて慎之助は、ほつと、かすかに溜息を吐いた。

「方針もなくて、出て行つたら、困るばかりぢやないの？」

「仕方がありません。」

慎之助は、かなしさうに言つて、頭を垂れた。

「そんなことを言つて……………まるでヤケね。」

「ヤケではありません。」

「ぢや、理由があるの？」

「……………」

慎之助は、頷いた。

「わたしに、話してよ。」

「あなたにお話したところで、どうにもなることではないのです。」
「まめ。」

美津江は美しい眼に、怨みを籠めて、じつと見ると、
『水くさいのね。』

と、言つた。

『……………』

慎之助は、俯向いてゐた。

『宮内さんは、ここから出て、その實、あの人のところに、行らつしやるつもりぢやないの？』
『あの人？』

『ええ。』

『誰ですか？』

『白ばくれて……………』

『本當に、分らないのです。』

『あの女の人のよ。いつか訪ねて来た、あなたの以前の愛人。』
『それは、邪推です。』

『さうかしら？』

『あれ切りどこへ行つてしまつたのか、僕は知らないのです。』

『本當に？』

『本當です。』

『ぢや、これから屋敷を出て、探さうといふのぢやないの？』
『馬鹿な！』

と、慎之助は、怒つたやうに力いづばい呷鳴つた。

『ご免なさい。』

美津江は、素直に詫びると、涙ぐんだ眼をして、

『わたし、心配なの。』

と、言つた。

『どうして？』

『本當に心配だわ。』

『何が、そんなに心配なんです。』

『こんなにして引き留めても、わたしの知らない間に、あなたは、また、どこかへ行つておしまひになりはしないかと思ふと、心配なの。』

『……………』

『今夜だつて、わたしが気が附かなければ、あなたは、このまま、行つておしまひになるところだつたでせう。』

『……………』

三

もう三時を過ぎて、四時に近い頃であらう。夜更の外気は冷え冷えとして、肌は冷たかつた。

——二人が、さうして木戸のところ立つて話してゐると、いつの間にか庭のはうから、誰かが近づいて来て、近くの木蔭に身を忍ばせたが、そんなことには、二人とも気が附かなかつた。

『ねえ、宮内さん。』

美津江は、あふれる涙を拭ふと、しみぐと呼びかけた。

『はあ。』

と、慎之助が返事をする、その顔を、美津江は、じつと見上げて、

『あなたが、この屋敷を出てお行きになるのでしたら、どうぞ、わたしも連れて行つて。』と、言つた。

『……………』

『おねがひですわ。——わたしも一緒に、連れて行つて。』

と繰返すと、美津江は頭を下げた。

『お嬢さんは、本気で、そんなことをおつしやるのですか？』

『あなたには、まだ、わたしの本當の氣持が、お分りにならないの。』

『さういふわけでは、ありませんが……………』

『ちや、何だつて今更、そんなことを、念をお押しになるの。』

『……………』

『わたし、今からでも、このまゝと一緒に行くわ。』

『……………』

『ねえ。おかへりにならないのだつたら、わたしも連れて行つて。』

『そんなことは……………僕には、出来ません。』

『なぜ？』

『……………』

『なぜ、出来ないの？』

『お屋敷を出ても、どこにも行く當てなんか無いのですから。』

『SSW。』

『どうして生活して行くか、それも分らないのです。』

『S.S.わ。』

『どんな苦勞をしなければならぬか、それも分らないです。』

『それでも、いいわ。』

熱心に、双眸をかがやかして言ふ美津江の言葉や、その氣持に、ウソや、偽りがあるとは思へなかつた。

『……………』

慎之助は、感動して、胸がいつぱいになつた。

(こんなに、自分のことを一生懸命に、思つてくれてゐるのだ!)と、思ふと、さすがに嬉しさに胸が慄へ、涙ぐみずにはゐられなかつた。——でも、感極まつたやうに、何にも言へなかつた。

美津江は、更にもう一度、びつたり寄り添ふと、自分のはうから、慎之助の手を、そつと取つて、

『わたしは、どんなに貧乏しても、どんなに困つても、そんなことは、何でもないわ。生活の上の貧乏や、苦勞など、あなたといつしよなら、わたしは、どんな辛抱でもするわ。』

と、熱心に言つた。

『……………』

でも、慎之助は、やつぱり無言だつた。たゞ、美津江が取つてゐる手は、かすかに反應が示されたやうな氣がしたけれども、それも美津江の氣のせむだか、どうだかわからなかつた。

——握つてゐる手が、ひどく慄へてゐることだけは、確かだつた。

『あなたが、連れて行つて下さるなら——あなたと、いつしよにゐられるなら、わたしは、どんな辛抱だつて出来るわ。生活のために、あなたといつしよに、働く決心だつてしてゐるわ。』

『お嬢さんの氣持は、よく分つてゐますが……そして、ありがたいとは思つてゐますが……』
と、言ひかけて慎之助は口ごもると、唇を噛んだ。

『うれしいわ。わたしの氣持が、わかつて頂いて。』

美津江は、感謝と、愛情とをこめて、握つてゐる手に、更に力をこめたが、胸を躍らして、

『それで、今から、わたしを連れて行つて下さるの?』
と、言つた。

『それだけは、どうぞ……許して下さいS.S。』

『え。』

美津江は眼を見張つて、

『これほどお願ひしてゐるのに、連れて行つて下さらないの！』
と、息を弾ませた。

『さういふことが、僕の身として、出来ることか、出来ないことか、よく考へて見て下さ。』
『なぜ、出来ないの！』

『……………』
『わたし、どんな苦勞だつてすると、言つてゐるぢやないの！』

『……………』
『ねえ、宮内さん。いよ／＼困つた時には、わたし、ダンサーになつたつて、働くわ。女給だつてするわ。そして、あなたに勉強をして頂くの。あなた一人くらゐは、わたし、どんなことをしたつて、養つて行けると思ふし、どんな苦勞でも辛抱して、あなたに勉強して頂くわ。』
『……………』

『ねえ、それでもあなたは、わたしを連れて行つては下さらないの？』

と、言つて美津江は、恨みと、哀願とをこめて、じつと見上げた。

『あなたは、夢を見てゐるんだ。』

『えつ、夢？』

『さうです！』

『いゝえ。決して夢ぢやないわ。』

『あなたの夢は、尊いと思ふ。——でも、さういふ夢は、現實に打つと、すぐに打ち壊されてしまふんです。かなしいことだけれども、僕は、どうしても信ずることが出来ない。』

『まあ。』

と、美津江は口惜しさうに、唇を噛みしめたが、

『あなたは、自分を裏切つた一人の女に絶望したため、すべての女の眞心を、信じることが出来ないの！』

と、すぐつゞけた。

監禁と追放

さつきから、木蔭に佇ずんで、二人の話を、すっかり聞いてゐたのは、思ひがけもなく、伯爵夫人だつた。

夫人は、厠に起きたが、偶と、木戸のはうで、何かボソ／＼と話し聲がしてゐるのが、かすかに聞えて来た。

「おや？」

不思議に思つて、硝子戸を細目に開けて、聞き耳を立てると、それは確かに人の話し聲に違ひない。

しかも、話の内容は、よく聞き取れないけれども、若い男と、女の話し聲で、聞き覚えがあるやうな気がするのだが、誰だか分らなかつた。

まさか、令嬢と、愼之助とが、この夜更に、あんな木戸のところなどで、こつそり落ち合つて、話してゐるなどといふことは、夢にも想像が附かなかつた。——初めの中は、雇人かも知れないと思つたが、かすかに聞えて来る話の調子や、言葉のアクセントなどが、どうも召使とも思はれない。

(誰かしら?)

と思つても、ハッキリ分らないことが、悟りかかつた。

十メートルばかりも距離がある上に、庭の植込が遮ぎつてゐるし、その上、月のない闇夜で、姿など見るべくもない。でも、四邊が水でも打つたやうに、しんとしてゐるので、意味のわから

ない聲だけが、ボソ／＼聞えて来るのが、どうも氣になつた。——誰か召使でも起して、確かめて来てもらはうと思つた。

厠を出て、お勝手のはうに行かうとすると、縁側の硝子戸と、雨戸とが、一枚開いてゐるのが、眼に附いた。

(まあ。)

と、夫人は思はず口の中で呟いたが、それで、あの話し聲は、屋敷の中の誰かであることが分つた。

その雨戸は、美津江が開けて、そこから出かけて行つて、そのままにしておいたものだつた。でも、夫人は、まだ、さうとは氣が附かなかつた。

(無用心ぞわ。)

と、呟いたが、その脊脱石の上に揃つてゐる庭下駄を突つかけると、そつと足音を忍ばせるやうにして、木戸の傍まで近づいた。

近づいて行つて見ると、それは思ひがけもなく、美津江と、愼之助の二人ではないか!

息をひそめ、胸を躍らせながら、そつと立ち聞きして見ると、美津江は、愼之助を愛し、慕つてゐる! いつしよに家出してもいいと言つてゐる。女給にでも、ダンサーにでもなつて、働い

てもいいとまで、言つてゐるではないか。

夫人は、立つてゐる大地が、見る／＼足もとから崩れて、わが身が陥没して行くやうな気がしてゐた。

(何んといふことだらう！)

夫人は、華奢な双の肩をすぼめるやうにして、息を呑んだ。

(何といふ恐ろしい！)

深い／＼溜息を吐くと、思はずその場に昏倒しさうになるのを、やうやく傍への椎の木に片手をかけて、身を支へて、猶ほも二人の話を聞いてゐた。

二

「あの方は、どうだつたか知らないけれども、女といふものが、皆なそんな者だと思はれることは、わたし、女の一人として、心外だわ。」

美津江は、もちろん聞く人ありとも気が附くはずはなく、わが愛の眞を、あらゆる言葉に盡して、頭に凝り固つてゐる慎之助の心を、必死に揺り動かさうとした。

「……………」

「わたしを、信じて頂けないの？」

「信じてゐます。」

「まあ。」

美津江は双眸をかゞやかして、我れとわが両手で、しつかと自分の胸を掻きいだと、

「うれしいわ。」

と、溜息を吐いた。

「僕、行かなければなりませんから……………」

慎之助は、ほのかに明るんで来た東の空を仰いだ。

「ちや、わたしも、いつしよに連れて行つて下さるのね。」

美津江は嬉々として、慎之助の顔を仰いだが、

「……………」

慎之助は、濃い眉をひそめるやうにして、黙つてゐた。

「では、わたし、ちよつと行つて、支度をして来るわ。」

「……………」

「その間に、わたしを置いて、行つてしまつてはイヤよ。」

「……………」

『約束して！』

『……………』

『ねえ、黙つて、行つてしまはないからと、約束して。』と言つて、美津江は不安さうな眼をして、慎之助を見た。

『……………』

でも、慎之助は、やつぱり何とも答へなかつた。

『なぜ、約束して下さらないの？』

『……………』

『では、わたしを、いつしよに連れて行つては下さらないつもりなのね。——わたし、分つたわ。』

美津江は、絶望的に言つた。

『……………』

『ひどいわ。』

と、美津江は涙聲で言つたが、

『でも、それならそれでいいの。わたしにだつて、考へがあるから。』

と、蒼ざめた顔の色をして、口惜しさうに唇を噛んだ。

『どんな考へですか？』

『このまゝでいいから、わたし、いつしよに行くの。』

『えつ。』

『さあ。』

と、美津江は、はげしい決心の色を、眉のあたりに見せて、

『わたしを、いつしよに連れて行つて。今からすぐに、連れて行つて。』と、言つた。

『……………』

『あなたが、連れて行つて下さらなくなつて、わたしは、いいの。——あなたが行らつしやるところなら、どこにだつて、附いて行くから。』

美津江は、それを單に言葉だけではなく、固い決心を以て言つた。

『そんな無理なことは言はないで、どうぞ聞き分けて下さい。』

慎之助は、ホト／＼持て餘した。

『わたし、ちつとも無理なことなど、言つてはゐないわ。』

『僕は、行かねばなりませんから……お嬢さんは、どうぞ、歸つて下さい。——こんなところ

を、若し、誰かに見られたら、どうするんです。』

『誰が見たつて、いいの。わたしは、いつしよに行くんですから。』

いくら言ひ聞かされても、美津江の決心は、動かすべくもなかつた。必死に思ひ詰めてゐる處女のことろは、死よりも猶ほ強いものがあつた。

『僕は、怒りますよ。』

『怒られても、いいの。』

『……………』

慎之助が、手の盡しやうもなく、困り切つてゐると、

『さあ、行きませう。』

と、美津江は、自分のはうから促がして、手を取つた。

『早く、このまゝ、いつしよに行きませう。——何を、そんなに、今になつてぐづぐづしてゐるの。』

さう言つて美津江が、慎之助を木戸の外に、引つ立てようとした時だつた。夫人は、つかくと現はれると、

『美津江さん。』

と、呼んだ。

『えつ。』

さすがに美津江は、愕然として、立ちすくんだ。

三

義母の伯爵夫人に見附けられた美津江は、もちろん屋敷に連れ戻されてしまつたし、慎之助も、とにかく一應、屋敷に歸らなければならなかつた。——そして二人とも別々に、それ／＼の部屋に、謹慎してゐなければならなかつた。

午後になつてから、美津江は、伯爵の前に呼ばれた。

潔癖で、頑固一徹で、それに夫人にたいしては、一目も二目もおいてゐる伯爵は、カン／＼になつて、憤慨してゐた。——どこの者か、氏も素性もわからないやうな人間と、戀愛關係に陥つたりすることは、潔癖な伯爵から見ると、この上ない不名譽であり、家門の汚れであつた。

『何と心得てゐるのだ。』

しづかな聲だつたけれども、伯爵のはげしい怒りは、じつと睨みつけるやうに見つめてゐる鋭い眼のかゞやきにも、膝においた瘦せた手が、ブル／＼と、かすかに慄へてゐるのを見ても分つた。

「……………」

美津江は黙つて、たゞ、かなしさうに、父の顔を見上げたと思ふと、すぐに伏せてしまった。
「美津江。お前は、家のことも、父のことも、自分の名譽も、何もかも忘れてしまつたのか？」
伯爵は、息を弾ませて、でも、努めて冷静に言つた。

「いゝえ。」

美津江は、頭を掉つて、悪びれたところもなく答へた。「

「忘れてはゐないといふのだな？」

「はあ。」

「忘れてはゐない者が、なぜ、どこの何者とも知れんやうな、あんな男と、不埒を働くのか？」

「わたし、決して不埒なんか働いた覚えは、ございませんけれども。」

「では、母さまが、ウソを吐いたといふのか？」

「わたし、母さまがウソをおつしやつたなどと、そんなことは、申し上げませんけれども……」

美津江は、きつとなつて、父の顔を見入りながら、

「でも、お母さまは、何とおつしやつたのでせう？」

と、聞いた。

「見た通りのことを、言つたのだ。」

「ですから、その見た通りのこととおつしやるのは？」

「お前は、あの家庭教師を、愛してゐるのだらう？」

「ええ。」

「あの男といつしよに、この屋敷から出て行くと、お前は、さう言つてゐたさうぢやないか？」

「ええ。」

美津江は、キツパリ頷いた。

「女給にでも、ダンサーにでもなつて、働くんだと、さうも言つてゐたといふことだが……」

「ええ。」

もちろん美津江は、父に向つても、ウソも隠しもなかつた。ありのまゝを承認した。

「それは、本氣か？」

「本氣ですわ。」

「家庭教師といつしよに、屋敷を逃げ出したり、女給やダンサーになつて働くことを、お前は、不名譽だとは思はないのか？ 伯爵家の令嬢として、それが恥かしいことだとは、思はないのか？」

「ええ。」

美津江は、父が激昂すればするほど、かへつて冷静になつた。

「わたし、宮内さんを愛してゐますの。愛してゐる人と、いつしよになるためには、どんなことをしたつて、わたし、恥かしいとは思ひませんわ。」

「何？」

「女給になつたつて、ダンサーになつたつて、働くことは、同じだと思ひますわ。——どうして、それを恥ぢなければならぬのか、わたしには分りませんわ。どんな職業だつて、働くことは同じですわ。職業そのものは、神聖だと思ひますわ。」

美津江は、父の前にも、わが所信を曲げることなく述べて、決して一步も譲る氣色も見えなかつた。

四

伯爵が、いくら説いても、怒つても、しかし美津江は、慎之助にたいする愛を、諦めようとはしなかつた。それは全く、死よりも強い愛だつた。

「勝手にするがよい。」

たうとう伯爵は、怒りと、絶望の果、投げ出すやうに言つた。

「お父さま。それは、どういふ意味でございますの？」

美津江は、冷静に聞いた。

「どういふ意味かといふのか？ お前は、お前で、勝手にしたら、いいと言つてゐるのだぞ。」

「では、わたし、勝手にいたしますわ。いくらおねがひしても、お父さまが心よく許して下さいません以上、わたしとしても、勝手にするよりほかありませんから。」

「わたしは、どんなことがあつても、あんな男との結婚なんか、氣持よく許してやることは出来な

So」

「ですから、勝手にしろと、おつしやるのでせう。」

「さうだ。」

「ええ。——では、わたし、勝手にしますから。」

「お前が、わしの言ふことを聞かないで、勝手にする以上、わたしも勝手にするから、そのつもりでゐるんだな。」

「お父さまが、勝手にすると、おつしやるのは？」

「お前を監禁することだよ。」

「えい。」

美津江は、冷然たる父の言葉を聞いて、さすがに、さつと顔色を變へた。
『お前の自由行動を、絶対に束縛してしまふんだ。』
『ひどいわ。』

と言つて、美津江は蒼ざめた顔をして、唇を噛んだ。

『仕方がないぢやないか。お前が、わしの言ふことを聞かない以上、わしとお前とは、父と娘といふよりも、敵と敵とに、分れたわけだからな。』

まう言つて伯爵は、慄へてゐる唇に、かすかな冷笑を浮べた。

『ええ。よくわかりました。——本當に、仕方がないのですわ。』

美津江は、決心したやうに、キツパリ言つたが、キラ／＼かゞやいてゐる眼から、ほろりと一滴、涙がこぼれた。

——斯くて、その日の中に、慎之助は、屋敷から追放されてしまつた。

ロメオの如く

清水が、美津江を訪ねた時には、美津江は、柳田伯爵家の本邸には、もうその姿が見えなくな

つてからだつた。

『どこへ行らしたのでせう？』

と、あわてゝ聞いて見ても、召使は當惑さうに、

『さあ……』

と、小首を傾げるやうにして、

『わたしたちには、どこへ行らしたのか、わかりませんけれど。』

と、言葉を曖昧にして、ハツキリ答へられなかつた。

そのそぶり、どうもへんなので、根掘り葉掘り聞いて見ると、固く口止めされてゐるらし

し。

『では、お政さんゐますか？』

お政に聞けば、或ひは本當のことが、分るかも知れないと思つた。

『ええ。』

『では、ちよつと、會ひたいのですが……』

と言ふと、召使が奥に入つて行つたが、入れ代りに間もなく、小急ぎにお政が出て來た。

『美津江さん、こゝには、あつしやらないんですつて？』

と、清水はお政の顔を見ると、急ぎ込んで聞いた。
『ええ。』

お政は、かすかに言つて、そつと頷いて見せた。
『どこへ行らしたんです？』

すかさず追究すると、

『別荘ですわ。』

といふ答へである。

『ふこの〜』

『葉山。』

と、小聲で言つたが、しかしお政は、四邊を憚かるやうに、

『でも、これは内證ですよ。——わたしが、お喋りしたといふことが、奥にわかりますと、それこそわたし、どんなに叱られるか知れませんか。』

と、注意した。

『宮内君と、いつしよ？』

『いゝえ。』

『では、一人？』

『ええ。』と、お政は頷いたが、

『でも、附添ひが二人、附いて行つてゐますの。』
と、言つた。

『どうしてお政さんは、附いて行かなかつたのです？』

『それはね、わたしは、お嬢さまの味方だといふことが、ご前さまにも奥さまにも、よくおわかりになつてゐらつしやいますからですわ。』

『美津江さんの味方なら、なぜ、イケないんです？』

『監禁ですから。』

『本當ですか？』

清水が、びつくりして確かめると、お政は黙つて、

『……………』

たゞ、眼顔で、それと知らせるやうにして、うなづいて見せた。

『どういふわけで、そんなことになつたのです？』

餘りの意外さに、清水はその理由を、聞かすにはゐられなかつた。

『それは、宮内さんのためなんですから……』

と、お政が掻いつまんで、事情を話して聞かせると、清水は、こゝろの中では、ほくそ笑んだが、でも、そんなことは顔にも見せず、

『それで、宮内君は、どこへ行つたか、分りませんか？』
と、聞いた。

『ええ。』

お政は、頷くと、

『あんな真面目な方だつたのに、本當にお氣の毒ですわ。』
と、同情した。

二

清水は、そのまゝすぐに、葉山の別荘に廻つて見た。

もう夕方だつたが、玄關に立つても、別荘の中はしんとして、人氣も感じられなかつた。それでも、とにかく、呼鈴を押すと、ジ、ジと鳴る音が、奥のはうから、かすかに聞えて來た。間もなく、清水も顔見知りの召使が、出て來ると、

『あら。』

と、かすかな叫び聲を洩らして、當惑さうに、顔を伏せた。

『取次いでくれませんか。』

と、清水が行きなり言ふと、

『あの、お嬢さまは、どなたにも、お目におかゝりになりませんから。』

と、召使は言ひにくさうにして、口ごもつた。

『それは、分つてゐますが、僕なら、いいでせう？』

『ですが……』

『やつぱり、僕でも、イケないんですか？』

『はあ。』

『なぜです？』

『少し、事情がござりました。』

『事情か。』

と、清水は獨りごとのやうに呟いて、苦笑したが、

『さうですか。——折角、僕は、美津江さんに會ひたいと思つて、東京から、わざわざ來たんですが……残念ですが、仕方がありません。』

と、言つたかと思ふと、存外あつさり、歸つてしまつた。

だが、そのまゝ東京に、歸つてしまふやうな、そんな單純な清水ではなかつた。彼は、そこから程近い自分の別荘に行つて、風呂に入つたり、夕御飯を食べたりして、日の暮れるのを待たつた。

八時近くになると、さすがに晩春の長い日も暮れて、四邊は眞暗になつた。それから支度をととのへると、また、柳田家の別荘に出かけて行つたが、今度は支關から案内を乞ふやうなことはしなかつた。

海岸に面した庭が、低い四つ目垣になつてゐる。それも既に古くなつて、ところ／＼壊れてゐるので、そこから自由に、出入りが出来る。

清水は、その垣の壊れたところから、庭に入つて行つた。廣い／＼庭である。植込みや、芝生●向ふに、洋館や、日本建の棟が、よく晴れた星空の下に、黒々とそびえて、ほのかに見えてゐる。

風のない、生温かな夜だつた。海は、とろりと風いで、波の音も聞えない。建物の窓も、縁側も、眞暗になつてゐるが、洋館の二階の窓が二つばかり明るくなつて、チラ／＼明りが射してゐるのが、大きく枝を擡げて茂つてゐる榎の梢越しに見えてゐる。

——ほかの部屋が、眞暗になつてゐるのに、その部屋だけ明るいことは、きつとそこに美津江が、監禁されてゐるにちがひないことを、明らかに示してゐるのだと、清水は思つた。そして、その部屋の窓下まで、そつと忍び寄つて行つたが、二階と下とである。どうして上つて行つたらいいのか、わからない。どこからか、忍び込むやうなところはないかと思つて、その邊をウロウロ探して見たけれども、すべての窓、すべての縁側が、嚴重に閉めてある。

すこし離れて、明るい窓を見上げてゐると、部屋の中で、人の影がチラ／＼動いてゐる。

それは、たしかに美津江の姿に、ちがひないやうな氣がする。

(どうして、入つて行つたら、いいだらう?)

大聲を出して、呼んで見ようかと思つたけれども、呼んだところで、上と下とは、思ふやうに話も出来ない。

美津江は、監禁されてゐる身だから、もちろん自由に、降りて來ることは出来ないだらうし、或ひは、あの部屋から一步も、外に出られないのかも知れない。

清水は、どうかして自分が、上つて行きたいものだ、と、焦慮してゐる中に、偶と、或ることを思ひ附いた。

(さうだ。)

ひとりでニツコリして、うなづくとき、すぐにスル／＼と、その榎の木をのぼりはじめた。

三

榎の木の本の太い枝が、ちやうど二階のバルコニーの上まで、差し出してゐるのである。清水は、その枝を傳ふと、難なく二階のバルコニーに立つことが出来た。明りの射してゐる窓まで寄つて行くと、窓の硝子戸は開いてゐた。

そつと部屋の中を見ると、美津江は安樂椅子に寄つて、しきりに紹刺しの針を、動かしてゐる。

美しい、面長な顔が、頬のあたりに、すこし憔悴を見せてゐる。ほのかな照明の光りが、上のはうから斜めに横顔を照らして、片つ方には、うすい影が出来てゐる。いつもの彼女よりも顔の色が、いくらか蒼ざめてゐるやうな気がする。

眼は熱心に紹刺しにそゝがれ、指の先は機械的に、間断なく針を動かしてゐる。長い睫毛が、時々かすかに瞬きをする。——ちやうど、清水の立つてゐる位置から見ると、影をつくつてゐるはうの横顔が、ギリシヤの彫像のやうに端正で、この世のものとも見えず、得も言はれず美しく、心も、魂も、魅せられて行くやうな気がする。

『美津江さん。』

しばらく恍とりとなつて、その美しさに見惚れてゐた清水は、やがて、聲をひそめるやうにして呼んだ。

『……………』

美津江は、わが耳を疑ふやうに、紹刺しの針を動かしてゐた手を止めて、ちよつとの間考へてゐたが、

『美津江さん。』

と、清水がもう一度呼ぶと、初めて振り向いたが、

『あら。』

と、かすかに叫んで、びつくりしたやうに、眼を見張つた。

『驚いたでせう。僕ですよ。そのドアを開けて下さい。』

『どこから、そんなところに、いらしたのですか？』

『はは／＼。ロメオのやうに、外から二階に上つて来るなんて、不思議でせう。——とにかく、いろ／＼話がありますから、部屋に入れて下さい。』

『でも、それは、困りますわ。』

『入れてくれなひんですか。ドアを開けてくれなければ、僕は、この開いてゐる窓から入ります』

よ。

『イケません。』

『そんな意地わるを言はないで……』

と、言つてゐるところへ、廊下のはうに足音がしたと思つたら、コツ、コツと、かすかにノツクの音がした。

暗い夜道

廊下に、突然、人の足音を聞き、つゞいてノツクする音を聞くと、美津江もあわてたが、清水は更にあわてた。

(こんな場面を、召使などに見られたら、それこそ醜態だ！)

と思つたばかりで、背中や、腋の下にはいつぱい、冷汗がにじんでゐた。既に、バルコニーから、開いてゐる窓の前にはまはり、今や窓框を跨がうとしてゐたところを、素早く足を引つ込めた。そして、つと壁の蔭に身を隠すと、びつたりと蝙蝠のやうにイギリス下見のペンキ塗りの板に張りつくやうにして、息をひそめ、全神経を集めるやうにして、耳をすました。

コツ、コツ。

一時、しんとしたかと思ふと、また、今度は先刻よりも、いくらか性急に、そして稍強めに、ノツクした。

『おッ。』

美津江は、清水の姿が見えなくなると、再びイスに凭つて、しづかに紹刺の針を取つて、落着いて返事をした。

すぐにドアが開いて、部屋に入つて来たのは、お近といふ年増の召使だつた。お近は、お政の次ぎの位置だが、伯爵夫人の大のお氣に入りだつたし、とても信用を得てゐた。——といふのは、そもく夫人がお興入れの時から、お付きとして、里方からいつしよに來てゐる召使で、陰日向なく夫人のためには忠實に仕へて、夫人のためなら、それこそ水火の中に飛び込むのも辭せないといつた工合である。

だから伯爵夫人のはうでも、自づと眼をかけることにもなれば、信任するのは當然だつた。

年も既に相當取つてゐるし、しつかりもしてゐるし、それにお政と違つて、たゞ徒らに美津江を可愛がるといふやうな、偏愛も持つてをらず、厳格な性質なので、監禁する令嬢の監督といふやうな役目には、まことに打つて附けだつた。——このお近が主になつて、もう一人若い召使

と、それに別荘番の老人夫婦に、その息子などが、美津江一人にたいして、全く水も洩らさぬやうな警戒をしてゐるのであつた。

「何か、用事なの？」

美津江は、振り向きもせず、指先は熱心に細刺しの針を動かしながら、平然として聞いた。

「お呼びになりましたか？」

「さうえ。」

「あら、それでは、わたくし間違つたのでせうか。——何だか、お呼びになつたやうに思ひました。」

と、白ばくれたのか、それとも本當なのか、びつくりしたやうな表情をして、ぐるりと部屋の中を見廻した。

「呼ばないわ。——何かの間違ひぢやないの？」

美津江は、相變らず何喰はぬ顔をして、平然としてゐた。

「でも、何だかおつしやつてゐたやうに思ひますけれども。」

「ウソよ。——わたし、何んにも言やしないわ。」

「ぢや、わたしたちの間違ひだつたのでせう……」

とは言つたが、それなら疑ひを解いて、さつさと部屋から出て行くかと思ふと、さうではなくて、ぐづ／＼してゐて、偶と、窓が開いてゐるのに眼を附けると、

「あら、窓が、閉め忘れてありますのね。夜風が冷や／＼してまゐりましたし、お身體にお毒になるとイケませんから、もうお閉めしませうね。」

何気なくさう言ひつゝ、窓の傍に寄つて來るらしいので、暗闇の下見板に、びつたりと身體を張り附くやうにして、息をひそめてゐる清水は、氣が氣ではなかつた。額には膏汗をにじませて、胸をわく／＼させながら、慄へてゐた。

すると、美津江の聲が、突然、

「そこは、今、閉めなかつたつて、いいのよ！ 暑くるしいから。」

と、言つて遮つてくれたので、清水はほつとした。

「閉め忘れたんぢやないのよ。わざと、開けてあるんぢやないの。」
つゞいて、美津江が言つた。

「さやうでございますか。——でも、わたしが……」

と言ふのを、美津江は更に、儼然として抑へるやうに、

「Yes!」

と、言つた。

『後で、やすむ時までには、わたしが閉めておくから。』
きつぱり、さう言はれると、お近はその上、押して自分が閉めるとは、強情が張れないらしく、

『それでは、お忘れにならないやうにおねがひいたしますわ。』

と言ひながら、猶ほ思ひ切りわるく、何気ないやうなふりをして、窓の傍に寄つて來ると、

『まあ、お天氣が變るのでせうか……波の音も、急に高くなつて來ましたし、月もない、星一つ見えない、氣味のわるいやうな、眞暗な空ですこと。——箱根山の航空燈臺の灯ばかりが、チラ／＼と、美しく見えてゐますわ。』

そんな獨りごとのやうなことを喋りながら、そのくせ箱根の航空燈臺の灯など見てゐるわけではなく、しきりにキヨロキヨロと、バルコニーの上や、窓下の暗い地べたなどを、透すやうにしては、誰かを探すやうにして、見てゐた。

二

『ほんとに、びつくりさせられてしまつた。——どうなることかと思つて、全く生きた心地もなかつた。』

お近が、部屋を出て、階下に降りて行く足音を聞きすましてから暫らくの間、清水は同じやうに羽目板にへばり附いて、じつと辛抱してゐた。

四邊が、眞暗なものと、お近がバルコニーや、階下の地べたばかりに眼を配つて、羽目板など氣を付けて見なかつたので、いい工合に見咎められずにすんだ。が、その間に清水は、どれくらゐ膽を冷やしたことが知れなかつた。——でも、お近が行つてしまふと、やがてバルコニーに出て、コツ／＼と、その扉をたゞいた。

美津江は、今度は立つて、しづかに扉を開けてくれた。が、清水が聲はひそめたけれども、仰山らしく喋べるのを、(しつ)といふやうな眼付きをして、

『静かにしてよ。』

と、小聲で注意すると、自分でバルコニーに出て來た。

『あなたが、あまり騒う／＼しくするものだから、すぐに分つてしまつたぢやないの。今度分つたら、それこそ大へんだから、氣を付けてよ。』

と、叱るやうに言つた。

『分つた／＼。』

と、清水は笑ひながら、首をすくめるやうにして頷くと、

『こんな牢屋に入れられてゐるやうな、窮屈な思ひをして、美津江さんも、よく辛抱してゐるものだな。』

と、言つた。

『だつて、仕方がないわ。』

美津江は、かなしさうに溜息を吐いて、眼を伏せた。

『こんな眼に逢ふのも、みんな宮内君のためですな。』

『……………』

『いつそ、美津江さんも思ひ切つて、逃げ出したらどう？』

『逃げ出せるものなら、わたしだつて、逃げ出したいわ。』

『それは、本當ですか？』

清水が、急に眼をかゞやかし、胸を躍らせて、我れにもなく自づと息が弾み、聲が高くなる
と、美津江は、心配さうに四邊に氣を配りつゝ、

『ええ。』

と、頷いたが、

『だつて、今のところは監視が嚴重だから、とても駄目だわ。』

と、絶望的に言つて、かすかに溜息を吐いた。

『駄目なことがあるものか。』

清水は、乗り氣になつた。

『ぢや、どうするの？』

『今からだつて、すぐに逃げ出せるぢやないか。』

『まあ。』

美津江は呆れて、双眸を見張ると、すぐには信じ得られないやうな色を浮べて、清水の顔を見
入つた。

『僕が、今、手傳つて上げるから、逃げ出すとさ。』

『でも、梯子もないのに、どうして降りるの？』

『僕は、梯子もないのに、こゝまで、上つて来たぢやありませんか。』

清水は、さも得意らしく言つて、微笑を浮べた。

『さうね。』

『上つて来るよりは、降りるほうが、わけはないですよ。』

『ぢや、清水さん。ほんたうに、手傳つて下さる？』

美津江は、いよく決心したやうに、念を押した。

「宮内君といつしよになるために、美津江さんが逃げ出すのを手傳ふのは、僕だつて聊か辛いですが……それも美津江さんの頼みとあれば、いくらでも僕は、犬馬の勞を辭しませんよ。」

「本當なら、わたし、どんなに感謝するか知れないわ。」

「本當ですとも！」

「ありがたう。」

「お禮を言ふのは、まだ、すこし早いですよ。ハハ……」

「あら。だつて、わたし、こゝから逃げ出すことが出来たら、こんな嬉しいことはないんですの。」

「やれ／＼、どうも當てられますな。——それも皆な宮内君のためだと思ふと、いつたい僕は、どうしたらいいんです。こんな割りのわるい役目は、恐らくないだらうと思ひますな。」

「すみません。」

美津江は、この辛い、切ない監禁から逃げ出したい一心で、嫌ひで／＼堪らない清水に向つても、つい詫言を言つて、頭を下げた。

三

着のみ着のままで、ハンド・バッグの中には、四、五十圓の小遣錢を持つてゐるだけだつた。だが、それで美津江は、ちつとも心細いとも思はなければ、かなしいとも思はなかつた。たゞ一途に、嚴重な、恐ろしい監禁から遁れて、自由の身になつたことが、嬉しくて堪らなかつた。慎之助は、屋敷から追放されて、どこへ行つたか分らないけれども、とにかくこれからは、慎之助の後を追うて、自由に行衛を探ることが出来るのだと思ふと、それだけでも喜びだつた。戀は人を勇氣附け、大膽にする。——戀の前には、山もなく、河もない。いかなる險難の道とて、遮ることなく、突き進んで行くことが出来る。ほんたうに戀くらゐ、はげしい力はない。盲目と言ふを休めよ！ 親を捨て、家を捨てた美津江が、猶ほ且つ、斯くも勇躍し、歡喜に浸つてゐられるのは、全く戀のためではないか。

戀愛こそ、人の生きて行く力であり、勇氣であり、戀愛こそ人生の光明であり、歡喜である。たゞ、美津江は、くるしい監禁の世界こそ遁れることが出来たけれども、どこに行くのか、そんなことは全く當てもなければ、知りもしなかつた。

乗合で、返子のステーションまで出て来た時、ちやうど東京から容を乗せて来たらしい空のタクシーが、すうと傍に寄つて来たので、

「さ、早く。」

と、清水は急いで、料金を掛合ふでもなければ、行先を決めるでもなく、自分でドアを開けると、美津江の身体を押し込むやうにした。

つゞいて自分も乗ると、運転手のはうでも、二人の様子で、凡そ察したのだらう。そのまゝスターターを切つて、急にスピードを出した。

『自動車に乗つたりして……行先が、わかるやうなことはないでせうか？ どこまで乗つたかといふことが、すぐ分るぢやないの？』

美津江は、運転手に聞えないやうに、清水の耳の傍に口を寄せて、小聲で、そつと聞くと、『大丈夫です。』

清水は言下に自信あり氣にキツパリ答へた。

『だつて……自動車の運転手に聞けば、すぐに分るわ。』

『ところが、このタクシーは、東京から来たのですからな。』

『あら、さう。』

やつぱり、あわてゝゐる美津江は、そんなことに、氣が附く餘裕はなかつた。運子ステーションの構内タクシーが、寄つて来たのだと思つてゐた。

『だから、切符を買つて、電車に乗るより、かへつて安全ですよ。』

『さうね。』

『とにかく、僕に任せておきなさい。大丈夫ですから。』

自動車は、暗い夜道を、快適な速度で走つてゐた。

宵の中は、あんなによく晴れて、美しく星が煌いてゐたのに、いつの間にか曇つて来てゐた空からは、この時、大粒の雨が落ちて来た。バラ／＼と、フロント・ガラスに打つかつて、銀色の太い筋を、斜めに引いた。その斜かひの縞目が、だん／＼繁くなつて行く。

『雨だわ。』

美津江は、當惑したやうに呟くと、清水は平氣で、

『かへつて、降つた方がいいですよ。——もつと、はげしい嵐にでもなつてくれたはうが、好都合ですよ。』

と、言つた。

『どうして？』

『後から、追つかげられる心配が、少なくなるでせう。』

『さう。』

美津江は、そんなことまでは考へなかつたけれども、なるほど、さう聞けば、そんなものかと

思った。——それなら、どうかして安全に逃げるためには、もつと／＼烈しく降つてくれるやうにと、いつの間にか心で祈つてゐた。

遁走二段飛び

自動車は横濱に入つて、驛前から生麥の方へ、京濱國道を抜けようとするガード下まで來ると、

『止めてくれ。』

と、突然、清水は運轉手に、聲をかけた。自動車は、かなりの速力で走つてゐたが、すぐに留つた。

『どうするの？』

美津江は、さつぱり分らず、不安さうに聞くと、

『降りるんです。』

と、清水は言つた。

『なぜ？』

『さうから、僕（ぼく）のする通りに、任せておいて下さう。』

まるで絶對權を揮ふやうな、高飛車な調子だつた。

『……………』

美津江は、それまでの清水の態度とは、すつかり勝手が違ふので、一時は啞然とした。でも、ここまで逃げ出して來るのを、手傳つて貰つたのだからと思へば、溫和しく清水の言ふ通りになるのが、當り前だと思つた。そして、言はれるまゝに、自動車から降りた。

清水も、つゞいて降りると、しばらくガード下に立つて、雨を除けてゐたが、すぐに空車が寄つて來た。

その時分には、雨は、ひどい本降りになつてゐた。

再びタクシーに乗り込んで、シートに腰を降ろしてから、運轉手が、後を振りかへるやうにして、

『どちらまで？』

と、聞くと、清水は簡單に、

『ニュー・グランドだ。』

と、答へた。

それで美津江は、やうやく清水が、どこへ行かうとしてゐるのか、今夜の計畫が初めて分つた。

だが、美津江は、清水のハッキリした氣持がわからないので、だんだん、かすかな不安を感じて来た。

いつたい清水は、今夜これから、どうする氣なのだらう？ いつしよにニュー・グランドまで行つて、自分もそこに、泊るつもりだらうか？

それとも、美津江だけを、安全に送り届けておいて、自分は東京にでも、歸るつもりだらうか？

まさか、ホテルに、いつしよに泊るとしても、一つ部屋に、ベッドを並べて寝るやうなことはないだらう。部屋は別々にしなければならぬし、若し、そんなことをしようとしたら、斷乎として拒めばいいのだ。假りに一つ部屋に泊るやうなことになるとしても、清水も青年紳士である以上、ちゃんと、それだけの禮儀は、守つてくれるだらう。萬一、亂暴な眞似をするやうなこともあつたら、その時は、その時のことである。自分さへしつかりしてゐたら、ちつとも危いことなどあるはずはない……

美津江が、そんなことを考へてゐる中に、自動車は、馬車道の賑やかな通りから暗い關内を抜

けて、雨の中を走り、いつの間にかニュー・グランドの玄関前の石段下まで来て、びたりと留つた。

突當りの帳場に行くと、すぐに四階の部屋に案内された。

海に面して、晝間ならさぞ見晴らしがいいだらうと思はれた。ボーイが、ブラインドを上げて、換氣のためだらう、窓の硝子戸を少し開けて行つたが、いくら大降りでも、風がないので雨は吹き込まず、港の灯が雨の中にうるんで、チラ／＼と美しくまたゝいてゐるのが見えた。

美津江と清水とが、イスに腰を降ろして、落着く間もなく、ボーイが番茶を運んで来て、卓の上におくと、

「ご用は？」

と、聞いた。

「さう。何もなうわ。」

美津江は、清水は歸るものとはかり思つてゐたし、夜も、もう十一時に近かつたし、精神の興奮と緊張から、かなり疲労を感じてゐたし、それにお腹もいつばいだつたし、さう言つて斷つた。

すると、ボーイが！禮して去らうとすると、清水は、

『ちよつと。』

と、呼び止めて、チラと美津江の顔色を覗ひながら、

『僕、ハイボールでも欲しいんだけれども……美津江さんは？』
と、聞いた。

『わたし、何も欲しくないわ。』

『ちや、僕、ハイボールを一ぱいだけ飲みたいけれども……いいでせうか？ 咽喉が渴いて。』
と、言った。

『どうぞ。』

美津江は、早く一人になりたいと思つたけれども、折角、わざ／＼こゝまで送つて来てくれたものを、それまで拒むことは出来なかつた。

二

ボーイが運んで来たハイボールを、二はいも空けた頃には、清水は陶然として、いい心持に酔うてゐた。そして、十一時は疾づくに過ぎてゐるのに、歸るやうな氣振りも見せなかつた。

雨は、いよ／＼はげしく、風も加はつて来た。

『僕も、このホテルに、泊つて行くことにするかな。』

やがて清水は、ほんのり微燠を帯びて来た顔を、ニヤニヤと綻ばせながら、そつと美津江の氣でも引いて見るやうな調子で言つた。

『あら、お泊りになるの？』

美津江は、ありありと迷惑さうに、眉をひそめた。

『何しろこの雨ですから。それに遅くなつたし。』

『自動車で、おかへりになれば、いいぢやありませんか。』

『あなたのために、わざ／＼こゝまで来たのに、そんなに美津江さんは、僕を追ひ歸りたいんですか？』

笑ひながらではあるけれども、厭味を言はれて見ると、

『そんなわけぢや、ありませんけれども……』

と、美津江はその上押し切つて、歸れとは言へなかつた。

『このホテルに、お泊りになるのなら、早くさう言つて、もう一つ部屋をお取りにならないと、困りますわ。』

『それは勿論、僕が泊る以上、部屋は取りますが……』

とは言つたが、べつにボーイを呼ぼうとするでもなく、

「美津江さんは、そんなに宮内君のことを、思つてゐるのですか？」
と、突然言ひ出した。

「ええ、思つてゐるわ。』

今となつては、美津江は別に、隠さうともしない。

「しかし、宮内君の行衛は、分らないぢやありませんか。』

「ですから、わたし、何年かゝつても、探す決心ですわ。』

美津江はしづかに、でも、キツパリと言つた。

「斯うして屋敷を出てしまつたのに、それでは生活の問題は、どうするんです？」

「何か職業を求めて、働ながら生きて行きますわ。』

「どうです？ 僕が生活のはうは、引請けませうか。』

「そんなこと、お断りします。』

美津江は言下に、毅然とした態度で、断つた。

「どうも、手きびしいですな。』

と、清水は照れくささうに微笑して、頭を掻いたが、

「宮内君には、ちゃんと、あんな愛人があるのに、それでも美津江さんは、まだ諦めないのです

か。しかも、いよ／＼東京に出て来たぢやありませんか。』

最後の切札でも出すやうに、清水はずばりと言つた。

「えつ。』

美津江は、さつとその瞬間、顔色を變へたが、

「どうして、そんなことを、知つてゐらつしやるの？」

と、驚いて息を弾ませた。——慎之助と、美登里との關係は、清水も、青木と慎之助との話を偷み聞きしたりして、よく知つてゐることは分つてゐた。でも、美登里が上京して来たことなど、どうして知つてゐるのか、美津江は、その素敏捷さに、びつくりせずにはゐられなかつた。

「可憐な女ですよ。美津江さんも、會つたことがあるでせう？」

「ええ。』

かすかに言つて、眞蒼になつた顔を、俯垂れてゐた。

「今、僕の屋敷に、おいてあるんです。賓客として、待遇してゐますよ。』

「まあ。』

「僕も、いづれ宮内君の行衛を探して、分つたら二人を會はせて、いつしよにするやうに、盡力する決心です。』

『あなたは、それでわたしを、苦しめようとなさるのね。』

『どういたしまして！ 愛すればこそですよ。——あなたを愛してゐればこそ、僕は、宮内君と、あの可憐な女とを、いつしよにしてやりたいのです。そのために力も盡すわけです。二人を會はせるつもりで、あなたの屋敷に行つた時には、既に宮内君は、お屋敷から追放された後だつたものですからな。僕は、どうしても宮内君の行衛を、探さなければならぬのです。あの女との間に、約束したこともあるものですから。』

清水は、人からかみやうな微笑を、ニヤ／＼浮べてゐた。

『いゝえ／＼、宮内さんは、わたしが探します！ 宮内さんは、わたしのものです。一度裏切つた女が、許されるはずがありません！ 自分から、愛する権利を捨てたのですから！』
美津江は、蒼白になつて、せい／＼息を弾ませ、全身を木の葉のやうに、わな／＼かせながら叫んだ。

『しかし、よく話を聞いて見ると、ナカ／＼純情な女ですよ。だから宮内君だつて、誤解さへ解けたら、また以前のやうな氣持に返ることは請合ですよ。』

『でも、わたし、宮内さんを、決して諦めませんから。』
もちろん美津江は、見たばかりでもあの可憐な美登里を、怨んだり、憎んだりする氣にはなれ

なかつた。しかし、斯くばかり思ひ詰めた憤之助にたいする自分の愛を、諦めようなどとは、更々思はなかつた。——どんなことをしても、自分のはうが、一日も早く宮内の行衛を、探し當てなければならぬといふ必死の決心を、思ひ返さうとはしなかつた。

『僕の方が、先に探し出して、あの女を會はせてやりますよ。』

『いゝえ！ わたしこそ先に、探しますから！』

『どうです？ そんな無駄な苦勞をしないで、僕と結婚してくれませんか？』

『厭です！』

憎悪に身を慄はせながら、美津江は、相手の言葉を撥ねかへすやうな、はげしい調子で叫んだ。

『どうしても？』

『え！』

『僕が、これほど美津江さんのことを、思つてゐるのに？』

『厭です。』

と、美津江は神經的に叫ぶと、つと立ち上つて、

『どうぞ、そんな話を、わたしにしないで下さい！ 二度と、そんな厭な話を、聞かせないで下

「あー」

と言ひながら、部屋の中を、ぐる／＼と歩き廻つた。

『さうですか。——そんなにまで、僕を嫌つてゐるのですか。』

清水は、さすがに顔色を變へて、獨りごとのやうに呟くと、同じところを、行つたり來たりしてゐる美津江の姿を、物くるほしく、怪しく燃えかゞやいた眼で、じつと追ひかけながら見つめてゐた。

雨も、風も、いよ／＼はげしくなり勝つて行くばかりで、夜は次第に、氣味わるく更けて行く。

三

美津江は、そつとドアの鍵を外すと、足音をぬすむやうにして、廊下に出た。入口が並んで、すぐ隣りの部屋に寝てゐるはずの清水の様子を覗ふと、しづかな寢息が、かすかに聞えて來る。帳場に降りて、急いで自分の勘定を言ひ附けると、そこにゐたボーイが、訝かるやうに、

『お連れの方を、お起しいたしませうか……』

と言ひながら、室内電話機に手を掛けたので、

『SSのボーイ』

と、思はず高聲で、あわて／＼押し止めたので、美津江は却つて、自分のその聲に、びつくりした。

『あの方、いつでもお晝すぎまで、寝てゐらつしやるんですから、あのまま寢かせておいて上げて。』

と、つとめて何氣なく、物しづかな笑顔で言つた。

『さうですか。』

ボーイは、まだ何か怪訝さうな眼ざしをして、美津江の顔を見てゐたが、その間に美津江は、大急ぎで勘定をすますと、カウンターからホールを突つ切り、玄關の石の階段を降りた。

昨夜の凄まじい嵐は、まるでケロリと離れたやうに、美しく晴れ渡つた、爽々しい朝だつた。

美津江のすぐ眼の前には、ひっそりした山下公園が、木々の青葉や芝生には露をおき、小徑の小さな砂利の粒々も、まだ濡れて、光つて、人影もチラホラとしか見えぬ、静もり返つてゐた。

その向ふには美しい朝の港が展けて、キラ／＼とかゞやいてゐる潮の上遙かに、房總の半島が、靨として霞でも棚引いたやうに見える。

だが、どんなに爽々しい朝の眺めも、美しい景色も、そんなものを美津江は、落着いて見てゐる心の餘裕など、まつたく失つてゐた。

(早く、こゝから逃げ出して行かなければ。)

といふことに、氣ばかり焦つて、あわてゝゐた。

ぐづぐづしてゐたら、今にも、清水が眼を醒まして、追つかけて来るのではないかといふ恐怖の觀念にばかり、おそはれてゐた。

いままで美津江は、横濱の岸壁には、アメリカに行く人を送つたり、迎へたりするので、二度来たことがあつたけれども、ニュー・グランドに来たのは、今度が初めてだつた。だから、ホテルの玄関を出ても、どつちに行つたらいいのか、さつぱり様子が分らなかつた。

でも、凡その勘で、左に行けば、櫻木町や、横濱ステーションに行く方角のやうな氣がした。そちらへ行くと、若し、清水が眼をさますと、すぐに追つかけて来て、造作なく見附けられさうな氣がしたので、逆に、反對の右の方に向つて、急ぎ足に歩いて行つた。坦々たるアスファルトの氣持のいい通りで、左手には海が開けてゐるし、直きに橋の畔に來た。橋柱には山下橋と書いてあつて、突き當りの丘の上には、立派な洋館が聳え、フランスの國旗が、朝の微風に吹き靡いてゐるので、それがフランス領事館だらうと分つた。

橋を渡らうか？ 右折しようか？ と考へながら、ちよつと佇ずんでゐるところへ、空の自動車があつたと寄つて来て、乗車をすゝめた。それで美津江は、渡りに舟といふ氣がして、すぐに乗

つた。

『ふじりきり』

と、運轉手に聞かれるまで、美津江は行先についても、これから自分がどうするかといふことについても、ちつとも考へてゐなかつた。

だが、咄嗟に美津江は、

『東京まで……さうね、銀座までいゝわ。』

と、答へてしまつてから、銀座などウロウロしてゐたら、かへつて直ぐに、清水にでも、屋敷の誰かにでも、見附けられさうな氣がして、不安だつたので、

『上野がいいわ。——上野ステーションまで、やつてよ。』
と、言つた。

上野に着いてから、どうするか？ といふことは、この自動車の中で、よく考へようと思つた。

とにかく美津江は、屋敷の追つ手と、清水と、二組の人々から追つかけられてゐるわけである。それ等の人々から見附けられない先に、どうかして慎之助に會ひたいものだと思つた。

同じ東京でも、上野のステーションは、慎之助の故郷に近いのである。或ひは、ひよつとした

ら慎之助に、上野驛の邊で、逢へるかも知れない。上野のステーションから、慎之助の故郷には歸つて行くのである。——その潜在意識が、咄嗟の場合に美津江に、上野ステーションまでと、つい口走らせたものと見える……

しばらくしてから美津江は、ハツとして自分でも、そのことに気が附いた。そして、こんなにまで自分は、慎之助を必死に慕うてゐるのかと、自分で自分の心持が可憐らしくなり、唖がうるんで來た。

(あの方には、すまないことかも知れないけれども。)

その涙ぐんだ唖の底に、可憐な美登里の面影を、くつきりと描きつつ、かすかに口の中でつぶやくと、ほつと太息を洩らした。——涙が一滴、睫毛をつたつて、ほろりと膝の上にこぼれた。

遅い歸り

酒に荒んだ一夜を明かして、清水が眼をさましたのは、例に依つて既に二時に近い時分だつた。

(美津江さんは?)

さすがに眼がさめると同時に、それが第一に心配だつたので、急いで隣りの部屋のドアを、たたいて見た。

だが、返事がないので、更に二三度、つゞけざまに、はげしくノックしたが、やつぱり返事がない。

(さては?)

と、胸をどきつかせながら、思ひ切つてドアを開けたが、美津江の姿など、どこにも見えず、空っぽではないか。

清水は色を失つて、あわてゝボーイを呼んで聞いて見ると、もう七八時間も前に、勘定をすまして、ひとりで發つて行つてしまつたとのこと。

『ちえッ。』

と、舌打ちすると同時に、ボーイに向つて、眼をむいて、

『なぜ、僕に、さう言つて知らせてくれなかつたんだ?』

と、怒鳴つても、べつにボーイの落度といふわけではなし、とにかく後の祭り、仕方がなかつた。

あゝして連れ出した以上は、いよく我が掌中の珠とのみ信じ切つて、心中悦に入つてゐたの

に、一夜眠ざめて見れば、いつの間にかその珠が、自分の掌中から消え失せてしまつてゐるではないか。

清水としては、こんな口惜しいことはなかつた。

(これも皆な、彼奴のためだ！あの宮内といふ奴があるために、美津江さんが、こんなにまで僕を嫌ふのだ。)

忌々しく、齒ぎしりを噛むやうな思ひをした果は、飛んでもない方角違ひの慎之助にまで、ブンブン八つ當りをして、腹を立てた。

愁ひ昨夜の中に、どんな手段でも講じて、有無を言はずキツパリと、自分のものにしておけば、こんな馬鹿な目を見ることはなかつたのだ。それを、斯うして屋敷から飛び出してしまつた以上、晚かれ早かれ、何といつたつて自分のものと、たかをくくつたのが不覺だつた。何も焦つて、無理をすることは無い。着のみ着のまま、飛び出して来たのだから、自分を頼るよりほかに、手も足も出ないに違ひない。急いで無理なことをしなくても、その中には、心から自分に寄りかゝつて来るものとばかり思ひ込んでゐた自分の考へが、甘かつたのだ。——あれから強かウキスキイなど飲んで、ひどく酔つぱらつて、要求されるまゝに、自分は、すぐ隣りの部屋を取つて、ベッドに上つたのは、既に二時近い頃でもあつたらうか？

とにかく、嵐の眞最中だつたが、はげしいウキスキイの酔ひが發して、ベッドに上つたのも無我夢中で、そのまゝ前後不覺に眠つてしまつた。——それもこれも、着のみ着のまま、金なんか、いくらも持つてはゐず、先の當てもない身で、ひとりで逃げ出して行くなどといふことは、豫想だにしなかつたからである。

それが、油断してゐる間に、小鳥は、いつの間にか、わが懐から飛び翔つてしまつてゐるではないか。

臍を噛んでも及ばないとは、全く、このことだつた。

(きつと、東京へ歸つたに違ひない。或ひは、今頃は、銀座邊でも、うろくしてゐるかも知れない。)

清水は、さう思ふと、すぐに自動車に命じた。

二

資生堂とか、コロンバンとか、トリコロールとか、いつでも美津江が出入りしさうなところへは、二度も三度も、極りがわるくなるほど、度々入つて見た。新橋から松屋の前の邊まで、いつでも美津江がブラつきさうな舗道は、眼をキョロ／＼光らせながら、六七廻も行つたり來たりして、歩いて見た。そして、役にも立たない友達には、四五人も打つかつたが、血眼になつて探し

てゐる肝腎の美津江は、影も形も見えない。行き逢つた友達の中には、美津江を知つてゐる者も、三四人はゐるので、聞いて見ても、皆な一様に、知らないといふ返事である。

(それでは、今日は銀座になど、姿を見せなかつたのだらう。)
と思つて、未練を残しながらも、やうやく諦めて、行きつけの裏通りのバーに入つたのは、九時すぎ、やがて十時に近い頃だつた。

それから二時間あまりも、その馴染みのマダムや、女給を相手に、コニヤツクや、ウキスキイを飲んだ。遂にはシャンパンまで三本も抜いた。

十二時過ぎて、自分の屋敷に歸つて來た時には、相當に酔つて、眞赤な顔になつて、アルコール臭い息を、フー／＼吐いてゐた、

『お歸りあそばせ。』

召使が、玄關まで出て、淑やかに迎へると、

『美登里さんは?』

清水は、先づそれが氣にかゝるらしく、第一に聞いた。

『あの、お部屋にゐらつしやると思ひますが……』

といふ返事を聞くと、清水は、

『さうか。』

と、言つた切り、そのままツカ／＼と、美登里に當てがつてある洋館の二階に、上つて行かうとするので、

『あら。』

と、召使がびつくりしたやうに、口の中で叫ぶと、

『お止しあそばせ。おやすみになつてゐると思ひますから。』

と言つて、あわてゝ清水の前に、立ちふさがるやうにした。

『大丈夫だよ。』

『でも、もうこんなに、遅いんでございますから。』

『まだ、一時前ぢやないか。』

『大抵な人は、もう眠つてゐる時間でございますわ。』

『若し、眠つてゐたら、起せばいいぢやないか。』

『……………』

『だが、眠つてしまつたか、どうか、分らんだらう。』

『はあ。』

『きつと、まだ、起きてゐると思ふよ。——とにかく、僕は、行つて見るから……若し、眠つてゐたら、すぐに引つかへして来るよ。』

言ふなり清水は、引き留めようとする召使の手を、振り拂ふやうにして、さつさと二階に上つて行つた。——よろめいて、一度は危ふく階段を踏みはづし、すべり落ちるところだつた。

三

清水は、美登里の部屋の前に立つと、それでもコツ、コツと、儀禮的に、ノックだけはした。すると、美登里は果して、まだ起きてゐたらしく、

『はさ。』

と、響きの應ずるやうに返事をして、内からドアを開けると、

『お歸りなさ。』

と、言つた。

(今日こそ、宮内君に、會はせてやるから……)

と、固い約束をして、昨日出て行つたまゝである。

日の暮れるまでは、空の美しく晴れた、いい天気だつたのが、夜になつてから暫らくすると、ぼつり／＼と雨が降り出して来た。そして、夜更けと共に風さへ出て、ますますはげしい嵐にな

つたが、美登里は、その物凄しい嵐の音を聞きながら、曉の四時頃までは、まんじりともしなかつた。——必ず會はせてくれるからと、固く約束をして、出かけて行つた清水を信頼して、もうこんな遅くなつては、その約束も當てにはならなかつたのだといふことが、分つてゐながら、やつぱり清水の歸つて来るのが氣になつて、どうしても眠れなかつた。

朝方、とろ／＼としたばかりで、一夜を明かし、今日も、晝になつても、夜になつても、やつぱり歸つて来ないので、どうしたのだらう? と心配してゐた。——きつと宮内に會はせてくれるといふ約束が氣にかゝつて、十時になつても、十二時になつても、どうしても眠るどころではなかつた。

美登里は、召使が持つて来てくれた晝集なんか見て、それでも今か今かと思つて、待つてゐるところへ、やうやく清水が歸つて来たのである。

清水が、酒に酔うてゐることなど、ちつとも苦にはならなかつた。たゞ、清水が歸つて来てくれたことが嬉しく、早く返事が聞きたくて、美登里は胸をわく／＼させ、いそ／＼として迎へた。

『あゝあ、飛んだひどい目に逢つてしまつた。——ちよつと、あなたの部屋で、休ませて下さ

と言ふと清水は、どたくと、よろめきのゆるやうにして部屋に入り、その長椅子の上に、くつたりと投げるやうに、身を横へてしまった。
美登里は、呆氣に取られたやうに眼を見張り、息を呑み、固くなつて、そこに立ちすくんでゐた。

身 邊 の 花

『どうなさいましたの?』

しばらく黙つて、立ちすくんでゐてから、オド／＼して聞くと、

『……………』

清水は、長椅子の上に横はつて、しづかに眼を閉ぢたまふ、何の返事もしなかつた。ほのかに酔ひの發した赤い顔には、片側から照明の光りが流れて、彫刻のやうにクツキリと、浮き上つて見える。

美登里は、どうしていいか分らず、また暫らく立ちすくんだまふ、息をひそめるやうにしてゐたが、

『お眠りになりましたの?』

と、思ひ切つて聞いて見た。

『……………』

だが、清水は、眠つてゐると思へないのに、臉を閉ぢたまま、やつぱり返事をしなかつた。

『もう遅うございますから、お部屋にお歸りになつて、おやすみなさいませ。』
と、言つた。

『……………』

返事はなくて、今度は本當に眠つたのか、かすかな寢息のやうな息づかひが、すう／＼と聞え出した。

『あら、イケませんわ。こんなところで、お眠りになつては。』

美登里が、途方に暮れたやうに、泣き聲になつて叫んでも、清水の寢息は、だん／＼それと、ハツキリして來るばかりで、眼をさましさうな様子もない。

仕方がないので美登里は、一つの椅子にキチンと腰を降ろして、しばらく待つてゐた。いつ眼をさますとも分らないのだが、自分は寢るわけにいかなかつた。——清水が長椅子の上に寢てゐると思ふと、ベッドに上ることも出來なう。

若し、清水が、このまゝ朝まで眼をさませないとしたら、美登里も朝まで、やつぱり斯うして、一睡もしないで、起きてゐるよりほかなかつた。

——さうして凡そ、一時間ばかりも過ぎたころだつたらうか。

『う、う、う……』

と、清水は、わけの分らない寢ぼけ聲で呻くと、長椅子の上で、寢返りを打つて、危ふく落つこちさうになつたが、そのはずみにパツチリと、眼をあいた。

『やあ。』

びつくりしたやうに、四邊をウロ／＼見廻して、

『僕は、どうしたんでせう？　こんなところに眠つてしまつて。』

弱々しさうな眼ざしで、美登里の顔をチラと見ると、苦笑した。

『……』

美登里は、端然として、椅子に腰掛けたまゝ、口を利かなかつた。たゞ、當惑さうに一つ溜息を吐くと、清水の顔を見返したが、明らかにその眼には、かすかな非難と、困惑の色が含まれてゐた。

二

清水は、美登里のその視線に逢ふと、何か悪いことを企らんでゐた子供が、急に叱責されてもした時のやうに、むくりと身を起した。

『僕の無作法を、美登里さんは、怒つてゐるのですか。』

辯解でもするやうに、ニヤ／＼笑ひながら言つた。

でも、見れば見るほど、美登里が美しく、蠱惑的で、可愛らしいのは、必らずしも清水の酔眼のせりばかりではなく、また、夢のやうに仄かな、照明の光りのせりばかりではない。

可憐で、清純で、一輪の野の花のやうに清楚な感じに満ちて、しかも、どこか男性の愛撫をそゝらすには措かない魅力を、自然に持つてゐることは、清水なども一見見た時から、疾づくに氣が附いてゐたところである。——それが今宵は、どういふものか、一層心を刺激されたのは不思議である。多分、今までは清水の心が、一途に美津江にのみ向つて走つてゐたのが、飽くまで美津江が強硬な態度を見せたので、これはどうしても諦めるよりほかはないと、観念したせりかも知れない。

それに、美登里は慎之助と、しつかり結び附いてゐるものとばかり決めて考へてゐたのに、しかし、よく考へて見ると、その實は、さうではないのである。——追つかけてゐるのは美登里だけで、慎之助の方は怒りに任せて、遮二無二、逃げ廻つてゐるのである。

清水は無關心に、自分からは遠い、はるかな存在と、ひとり決めにしてゐた美登里が、今は斯くも身近かに——實は掌中にあるのだといふことに、初めてバツと眼でも覺めたやうに、氣が附いたのである。

——見れば見るほど美しく、しかも急に魅惑的な存在になつて來たのも、全く、そのせゐに違ひなかつた。

手折らうと思へば、すぐにも折り取ることの出来る身邊に咲いてゐる美しい花！ さう思つて見ることのために、餘計美しくも、魅力的にも見えるのであつた。

「お部屋に歸つて、おやすみになりましたら？」

美登里は、自分が厄介になつてゐるのに、こんなことを言つては、わるいかしら？ と思つたけれども、でも、言はずにはゐられなかつた。

「追つ立てるんですか？」

と、清水は媚びるやうな眼をして、苦笑した。

「あら、そんなわけでは、ありませんけれども……」

美登里は、顔を赧らめて、あわてゝ辯解した。

「だつて、もう、こんなに遅いでももの。困りますわ。」

と言つて、チラと隅棚の上の置時計に眼をやつた時、ちやうど時計は、チン、チンと、二つ打つた。

『二時か。』

と、清水は獨りごとのやうに、つぶやいたが、

「僕にとつては、まだ、そんなに遅いといふ時間ではありませんよ。」

と、紅い、鮮やかな色をした唇の間から、眞白な、美しい齒並を見せて、ニヤ／＼しながら、生あくびをした。

三

『離してよ。』

美登里の顔の色は、さつと蒼ざめたかと思ふと、必死になつて身を藻掻きながら、さげんだ。

でも、手首にねばり附いたやうに絡んでゐる清水の女のやうに白い、華奢な手は、ナカ／＼離れず、

『いぢやありませんか。そんなに逃げなくても。』

と、それでも言葉だけは丁寧に、落着いてゐた。

「わたくし、逃げるわけではありませんから……」

『しかし、僕が手を離したら、逃げるでせう？』
『さうえ。』

『約束しますか？』

『約束しますから……どうぞ離して下さいませ。』

美登里は、涙ぐんだやうな聲になつて、哀願した。

たとへ、それが無意味であつても、異性の手が、自分に觸つてゐるなどといふことは、處女の身に取つては氣味がわるく、不快なことだつた。

『ちや、逃げないで、部屋に入つて下さい。——いろいろ話があるんですから。僕は、歸つて來てから、まだ、何も話をしてゐないぢやありませんか。』

清水に言はれて、手を離されると、美登里としても、

『ええ。』

と、素直にうなづかないわけには、いかなかつた。

清水の部屋の入口の前だつた。自分の部屋に歸るから、送つて來てくれと言はれるまゝに、入口のところまで送つて來た。そこから引つ返さうとすると、清水はあわて、美登里の手首を掴み、部屋に入れと言つて、離さな

いのであつた。

清水が先に立つて、電燈のスイッチを入ると、扉を開けた。書齋につゞく寢室だつたが、重い、厚ぼつたい幕で仕切られてゐるので、美登里が、清水の後から入つて行くと、たゞ、豪華な、廣い書齋一部屋だけが、眼に附いた。

『よく來てくれましたね。さあ、お掛けなさい。』

清水は、機嫌よく言つて、落着きなく立つてゐる美登里に、一つのアーム・チェアをすゝめたりした。

『わたし、すぐに、失禮したいと思ひますから。』

美登里は、腰なぞ掛けて、落ちつくどころの氣持ちではなかつた。——どうかしてこの部屋から、二人切りの息詰まるやうな苦しさから、早く逃げ出したいと思つて、苛々してゐた。

『そんなに急がなくても、もう少し付き合つて下さい。僕は、これから一ぱいコニヤツクでも、飲みたいと思ふんです。ほんの一ぱいですよ。それを飲んだら、ぐつすり眠りますから。』

清水は、強ひて美登里に椅子をすゝめ、ひとりで勝手なことを喋りながら、サイドボードから、小さなグラス二つと、コニヤツクの瓶などを取り出して來て、テーブルの上に置いた。

(何もかも、ほんたうに何もかも、これでおしまひだ。)

ほのかな夜明けの明るみが、白々と射し初めてゐた。

でも、美登里には、朝だか、晝だか、夜だか、そんなことは一向わからなかつたし、問題でもなかつた。

頭腦のしんが、痺痺れたやうになつて、まるきり、すべてのことを思考する力もなかつた。

かなしいのか、口惜しいのか、そんなことは分らなかつた。たゞ、濃い霧でも、もう／＼として立ち罩めたやうに、何が何んだか分らない。

だから、あんなに口惜しい眼に逢つたのに、涙一つこぼれない。——自分でも、いつの間、どうして清水の屋敷を逃げ出して來たのか、まつたく分らなかつた。これから、どこへ行かうとするのか、どうするつもりなのか、そんなことも、まるきり分らなかつた。

美登里は、ぼんやりと石の柵に凭るやうにして、佇ずんでゐた。石の柵には、鐵の鎖が張つてあるし、眼の前には、廣い／＼水が、流れてゐる。

さつきまでは暗かつた水の面が、空の明るみを映して、次第に仄かな光りを、反射してゐた。でも、美登里は、水の流れなど、見てゐるのではなかつた。

たゞ、ぼんやりと眼を見張つてゐるだけで、何も見てはゐない。瞳は乾いたやうに、キラ／＼

と、妖しげにかゞやいてゐるのであつた。が、それは外界の事物を何一つとして、映してゐるのではなく、彼女自身の空虚な、空洞のやうな心を、反映してゐるのにすぎなかつた。

それは感情もなければ、まつたく理智も失つた眼色である。氣抜けといふか、狂人といふか。とにかく、人間の異常な心理状態を示してゐる。氣味のわるい、恐ろしい、凄惨な眼だつた。

空も、水の上も、だん／＼その明るみを、増して來た。そして、はるか向ふに見える長い／＼鐵橋の上を、一臺の電車が走つたのを手始めにしたやうに、曉の都會の騒音が、徐々に複雑に、しかも加速度に、高まつて來つゝあつた。

(あゝ！)

美登里は、胸の底から、深い／＼溜息を吐いた。

(もう駄目だわ。)

もう／＼と霧が立ち罩め、痺痺したやうになつてゐる頭腦で、再び、かすかに／＼さういふ思考が閃めき、心の中で呟いた時に、急に眼の奥の方が、ツンと熱くなつて來た。と思ふ中に、たちまち涙がにじんで、ハラ／＼と頬に流れた。

(さう！)

美登里は、流れる涙を拭はうともせず、我れと我がこゝろに強くなつくと、初めて眼の前に

擴がつてゐる水の面に、じつと視力をそゝいだ。

(わたし、いつまでも、こんなことをしてはゐられない。)

何かに憑かれたやうな、そして追ひ立てられるやうな、何かひどく忙がしい、せか／＼した氣持になつて來た。

五

美登里は、さながら夢遊病者のやうに、低い石の柵に張られてゐる鎖を跨いで、緩い傾斜になつてゐる堤のやうなところに、一步踏み出してゐた。その傾斜面には、芝のやうな丈の短い雜草が生えて、二メートルばかり下には、漫々たる水が、ひた／＼と押し寄せて來て、びちや／＼と、かすかにさゝやくやうな聲を立てゝゐる。

(宮内さん。)

と、かすかに口の中で呼んだと思ふと、その刹那、我れ知らず胸の上に、合掌してゐた。

父のことも、義母のことも、弟のことも、思はなかつた。青木先生のこと、忘れてゐた。たゞ、慎之助の面影だけが、くつきりと眼の前に浮んで見えた。——いつかの夜、故郷の神社の境内に神木として祀られてゐる桂の古木の下で、慎之助と戀を誓つた時の有様が、今、ありありと眼に浮んで、見えて來た。

あの時には、月の光りに煙つたやうなM——山脈が、そのくつきりした見事な線や、細かい巒々の陰影まで、ハッキリ見せてゐたし、月光にかゞやくM——川の流が、さながら燐し銀のやうに、煙つて見えてゐた。

鎮守の境内の桂の木の下で、戀を誓へば、その戀は必ず遂げられるといふのが、遠い昔から、多くの人々が言ひつたへて來たところだつたのに。

それなのに、そこで誓つた二人の戀が、斯くもみじめに、慘ましく、かなしく敗れようとは！
(もう、駄目だわ。)

幾度かの危機に逢ひながら、しかも自ら固く守つて來た處女を失つてしまつた。あの悪夢のやうな一瞬間の恐ろしさを思ひ出して、身慄ひした。

(許して！)

悲鳴のやうに叫んだと思ふと、足は地を蹴り、身は宙に浮き上つてゐたが、その時だつた。

『待て！』

叱咤するやうな、はげしい男の聲が、突然、後に聞えたと思ふと、一旦、宙に浮いたと思つた美登里の身體は、しつかりと、抱きすくめられてゐた。

『放しな！』

と叫んで、美登里は殆んど無我無中で、必死になつて身を藻掻いたが、抱きすくめてゐる手は、執拗くからみ附いて、容易に離れるべくもない。

『落着くんだ！』

男は、あまり強くもないと見えて、必死に藻掻く美登里の不思議な力を、少し持て餘し氣味に、

『わけを、よく話して下さい。死ぬなんて、間違つてゐるから！』とにかく、わけを聞かう。』と、息をはずませながら、一生懸命に有めた。

放れようとするし、離すまいとするし、二人が必死になつて争つてゐる中に、朝露に濡れた雑草に、足を踏みすべらして、あつーといふ間もなく、二人の身體は組み合つたまゝ、傾斜面に倒れた。起き上ることも出来ない。

そのまゝ、する／＼と滑つて、汀まで落ちて行くと、冷りと二人の足の先が、まづ、水に浸つた……

女給になつて

通りがかりの舗道で、偶と氣が附いたのは、眼の前にブラ下つてゐる、

若き麗人を求む

と、下手くそな毛筆で書いた、ボール紙の札であつた。

美津江は、かなりお腹も空いた上に、何時間とも分らないくらい長い間、當てもなく歩き廻つてゐたので、すつかり、へと／＼に疲れ切つてゐた。もう一步も歩くのがイヤだつた。——イヤといふよりも、この上は歩けないといふ方が、ほんたうかも知れなかつた。

そこへ、若き麗人を求よといふ札が、眼に附いたのである。

(こゝへ入つて、相談して見ようかしら……)

と思つて、ちよつと立ちどまつて、考へて見たけれども、でも、すぐには入つて行く勇氣がなかつた。

若き麗人と言へば、きつと十六七歳くらいのも、美しい人のことだらう。でも、美津江は、年齢も既に二十歳を過ぎてゐる。その上、自分を美しいなどと已惚れた氣持は、みぢんも持つてゐなかつた。

だから、この募集の札を見て、足は止めても、すぐに入つて行くだけの勇氣が、出なかつたのである。

その上、喫茶店といふのが、果してどんなところか、さつぱり内部の様子が分らないことも、不安な気がした。美津江は、銀座の表通りの喫茶店に入ることはあつても、それはきちんと制服を着た男のボーイが、サービスしてくれる、真面目で、上品な店ばかりである。——噂に聞いてゐる所謂喫茶ガールなどが、たくさんゐるやうなところに、入つた経験は、一度もない。

持つてゐた少しばかりの小遣も、あれからすつかり使ひ果してしまつたし、何か職業を求めて働かなければならないことは、焦眉の急に迫られてゐる。でも、友達や、知己を頼つて、職業を求めることは、現在の美津江の立場として、全く不可能だつた。——そんなことをしたら、すぐに見付け出されてしまふだらう。

一番手つ取り早く、しかも誰からも隠れて、比較的容易く就ける職場は、喫茶店の女給からゐるものである。

美津江は、一度は諦めて、通りすぎた。が、一丁ばかり行き過ぎてから、また思ひ直して、引返して来た。

それでも、しばらくは入口に行んで、ためらつてゐたが、思ひ切つてドアを押して、入つて行つた。——一度、入口をくゞつてしまふと、我れながら不思議な気がするくらゐ、落着いて、『こちらで、人を募集してゐらつしやるやうですけれども。』

と、すらくと、口を利くことが出来た。

見かけに依らず、内部は、相當に広いサロンだつた。美津江の眼には、裝飾でも、セツトでも、すこし悪どい感じだつたけれども、でも、斯ういふのが、近代的な好みとでもいふのかも知れないと思つた。

『それでは、表の札を見て、いらしたんですか。』

レチスターのところ立つてゐた、ポップの可愛らしい、小柄な女の子が、やさしく言つてくれたので、美津江は、ホッと胸を撫で降ろした。

『奥に行つて、マダムにお會ひになつたら、いいのよ。——ルミちゃん、こちらを、奥にお連れして。』

と、銀色のトレイを抱へるやうにして、そこに通りかゝつて来た一人の女給に言つた。

二

マダムといふのは、年は二十七八歳でもあらうか。女給たちが、モダンなパーマネットで、腕も露はな洋装で、アイシャドウや、ルージュで、毒々しいメイクアップをしてゐるのに、マダムは、淑やかな日本風だつた。ウェーブこそパーマネットを掛けてゐるが、上品な洋装にしてゐた。すこし背の低い憾みはあるが、大柄な綺の和服を着て、帯を締めた姿が、粹で、美しかつ

た。黒い眼が、パツチリと大きく、小ぢんまりした鼻が、高かつた。

『こちらね、お店で、働きたい希望なんですつて。』

ルミと呼ばれた女給は、さう言つて美津江を紹介した。

マダムは、しよんぼり立ちすくんだやうに、俯垂れてゐる美津江を、一眼で睨むやうに、鋭く見たが、

『あなたは、本気で、働いて下さるんでせうか？』

と、念を押した。

『ええ。』

と、美津江は眼を上げると、チラとマダムの顔を見たが、

『でも、わたしのやうな者でも、働けるでせうか？』

と、心配さうに聞いた。

『それは、もう！』

と、マダムは力づよく言ふと、うなづいて見せて、

『喫茶店の女給なんて、ちつともムツかしいことではないんですもの。誰にだつて働けますよ。』と、説明した。

『わたし、こんなところに働くのは、初めてなんですけれども。』

『それは、分つてゐますわ。』

『年齢だつて、もう二十歳を、過ぎてゐるんですが。』

『でも、あなたは、若く見えますわ。——ちよつと見たところは、十八九にしか、見えませんわ。』

『まあ。』

『何も、煽てるんぢやないの。ねえ、ルミちゃん。二十歳を過ぎてゐらつしやるにしては、とても、若く見えるわね。』

と、マダムは、そこに立つてゐるルミを顧みて、微笑すると、

『本當ですわ。』

と、ルミは心から、相槌を打つた。

『こゝに、寝泊りが、出来るでせうか？』

美津江は、そのことが、気がかりだつた。

『ええ。こゝに寝泊りしてゐる人もあるし、よそから通つて來てゐる人もあるわ。さうね、十六人ゐる女給の中、半々くらゐなものかしら。』

と、マダムが言った。

『わたし、家がないんですの。』

と言つて美津江は、いかにも恥かしさうに、顔を赧らめた。

『冗談を。』

マダムは、美津江の身振や、氣品のある姿を見ると、彼女の言葉が、信じられないやうな氣がした。

『本當ですわ。』

と、美津江はムキになつた。

『どうして?』

『わたし、本當のことを、お話ししたませうか。』

『どうぞ。』

『家出したんですわ。』

『さう。』

マダムは、格別びつくりしたやうな様子もなく、しづかに頷くと、

『初めから、何だか、事情のありさうな、ご様子だとは思ひましたけれども……さうですか。』

と、しづかに言った。

『ですから、そつとこゝに、隠しておいて頂きたいんですわ。』

『隠しておく?』

『おねがひですわ。』

と、美津江は一つお辭儀をすると、じつとマダムの顔を見つめて、

『その代り、わたし、どんなことでも、働きますから。』

と、言った。

そこは、エンゼルといふ喫茶店だつたが、その時から美津江は、そこで女給として働くことになつた。

美津江の美貌と、淑やかさは、忽ち人氣を博して、一躍スターになつた。

三

浅草六區の明星座には、この頃、東都再見參の新生劇團といふのが掛つて、珍らしく大當りを取つてゐた。何でも一年とか二年とか、かなり長い間を、地方ばかり興行して廻つてゐた小さな劇團である。——それが、つい一ヶ月ばかり前、どうした風の吹き廻しか、東京に舞ひ戻つて來た。

東京に舞ひ戻ることには、戻つて来て、すぐに芝居がやれるわけではない。しばらく下谷邊の木賃宿のやうなところに、くすぶつてゐた。

その中、明星座の座主との間に、興行の話がまとまつた。とにかく、初めは十日間の豫定で、ふたをあけて見たところが、どうした風の吹き廻しか、今までは、どこに廻つても、一向にうだつの上らなかつた新生劇團が、今度ばかりは初日から、大へんな當りを取つた。一日二回興行が、満員つきである。十日間の豫定のところが、日延べくとつといて、一ヶ月近くも大入りを取つてゐる。

いよ／＼あと四五日で、月が變つたら更に出し物を新たに、今度は初めから一ヶ月興行を計畫して、大いに氣勢を揚げることになつてゐる。——もちろん、座主との間には、取敢ず一年間といふ長期契約を、結んでしまつた。

『ねえ、ミツさん。わたし、今日は芝居を奢つて上げるわよ。』

マダムに、突然、耳元でさゝやかれると、美津江は、『まあ。』

と、びつくりしてしまつた。——しばらくは、二の句が次げなくて、マダムの顔を見てゐた。美津江は、こゝに、働くやうになつてから、ミツと呼ばれてゐた。

『あなたは、よく働いてくれるから、お禮だわ。』

マダムは、につこりした。——實際、美津江が働くやうになつてから、エンゼルの賣り上げは、たしかに二割に近い増額を示してゐた。

『だつて、それではわたし、ほかの方にわるいわ。』

『さうよ。』

マダムのアケミは、ちよつと眼で抑へるやうにして、

『ほかの人たちには、内證にしておくからいいわ。』

『だつて……』

美津江は、芝居なんか、ちつとも見たいとも思はなかつたし、氣がすまないので、ためらつてゐた。

マダムは、熱心に、

『そんなに、遠慮するものぢやないわよ。わたしが芝居を奢ると言つたところで、そんな大歌舞伎といふわけぢやなし……淺草の明星座なの。』

『……………』

美津江は、明星座などと聞いても、何が何だか、見當も附かなかつた。厳格な家庭に育てら

れて、劇場などには、あまり近づいたことがないのである。沉んや淺草などのやうな盛り場の小さな芝居小屋など、一々知つてゐるはずはなかつた。

『そこに新生劇團が掛つて、大へんな評判なのを、知らないの？』

『まあ、話せないわね。』

と、マダムのアケミは、冷かすやうに笑つたが、

『新生劇團には、わたしの知つた役者がゐるのよ。』

『さうですか。』

『井上金之助つていふの。とてもきれいな立役なの。』

と言ふと、三十歳に近い年齢をしてゐるマダム・アケミは、處女のやうに仄かに、顔を赧らめた。

だが、美津江は、井上金之助が何だか、立役といふものが、どんなものだか——そんなことを知るはずはなかつた。でも、マダムが羞むやうに顔を赧らめたことには、氣が附いたが、その氣持の意味など、分るはずはなかつた。

マダムと役者

見てゐると、すこしグロテスクなところもあるし、はげしい立廻りや、殺陣の場面が多いことなども、新しい時代の大衆の人氣に投じた理由なのだらう。——とにかく美津江は、こんな芝居小屋などに入つたのは、生れて初めての経験だつたが、ナカ／＼盛んな景氣だつた。

座席は満員で、周囲の壁際に立つてゐる観客も多く、一階から二階から、文字通りの立錐の餘地もない。のべつに見物からは、聲がかゝつた。はげしい大殺陣の場面など、観客席からの拍手や、聲援や、怒號などで、まるで場内は、割れ返るやうな興奮の坩堝に、煮え立つた。

『スゴいわね。』

マダムは、観客の熱狂といつしよになつて、興奮してゐた。——自分も溜息を吐いたり、手をたゝいたり、譁嘆の吹き聲を洩らしたり、キラ／＼とかゞやく瞳が、熱心に舞臺にそゞがれてゐる。

だが、美津江の氣持は、獨り孤獨だつた。マダムや、その他の見物人といつしよになつて、どうしても興奮出来ないばかりか、見てゐても、ちつとも興味が湧いて來ないし、何か空々しい氣

がする。

それよりも、そんなことは、あり得るはずがないことは分つてゐながら、若しかしたら？と思ふのである。——若しかしたら、この大勢の人々の中に、慎之助が混つてゐるやうなことはないだらうか？

顔、顔、顔。

薄暗がりの中に、幾つもの顔が舞臺に向つて、キラ／＼と眼をかゞやかしてゐる。若しこの中に慎之助が一人混つてゐるとしても、それを探し出すことは容易ではないだらうし、萬々が一人も、この中に慎之助がゐるはずはないのである。ゐるはずがないことは分つてゐながら、それでも若しかしたら？といふ期待に心を引かれて、美津江は舞臺よりも、かへつて大勢の見物の顔の中から、慎之助の顔を發見しようとして、そつちに注意と、視線を配らすにはゐられなかつた。——これは、どこに行つても、この頃の美津江の癖である。店にゐる時には、店に来る客の中に、往來を歩けば、行き交ふ人々の中に、乗り物に乗つた場合には、同車してゐる人々の中に、美津江はいつでも、慎之助を求めずにはゐられない。

『そら、あの人が、井上金之助なのよ。いいでせう。』

マダムは、美津江の袖を引いたが、狂人じみてかゞやく瞳は、じつと舞臺から離れなかつた。

『……………』

でも美津江は、ちつとも立派だとも思へなければ、美しいなどとは感じられないので、黙つてゐた。

今の美津江に取つては、慎之助のことだけで、心がいつばいである。——ほかの者などのことは、振り向いても見る餘裕もなかつた。

『後で、會はせて上げませうか。』

と言つてマダムは、溜息を吐いた。

『誰に？』

『金之助に。』

『まあ。』

美津江に取つて、そんなことは聞くだに厭はしい限りだつた。

『そんなイヤな顔をしないで、つきあひなさいよ。』

マダムは、笑つた。

二

芝居が閉場ると、美津江はマダムから、劇場の近くの小さなレストランに誘はれた。——美津

江は、そんなところに入るのはイヤだったし、早く歸りたいと思つた。でも、マダムから餘り熱心にすゝめられると、自分一人だけ、振り切つて先に歸るわけにも、いかなかつた。

『ミツさんは、何を食べる？』

と、マダムから、機嫌を取るやうに聞かれても、

『わたし、今は、何にも欲しくないの。』

美津江は、ほんたうに、何もほしいと思はなかつた。

『イヤね。』

『どうして？』

『怒つてゐるの？』

『あら、わたし、何にも怒ることなんかありませんわ。』

『そんならいいけれども……わたしが無理に、こんなところに誘つたりしたものだから。』

マダムにさう言はれると、美津江としては、自分勝手に、面白くない顔もしてはゐられなかつた。——欲しくないものも、すゝめられるまゝに注文したり、飲みたくないものでも、無理に飲んだりしなければならなかつた。それが苦痛でも、さうするよりほかはなかつた。

二十分餘りも経つたかと思ふ頃、一人の若い男が、二階の食堂に上つて來ると、ちよつと立ち

留つて、ぐるりと見廻してゐたが、直きにマダムを見附けた。

『こゝよ。』

マダムが、ニツコリして眼で合圖をすると、若い男もすぐに微笑で應じて、つか／＼と近づいて來た。

『久しぶりね。』

マダムが、いそ／＼として迎へると、若い男は、チラと美津江を見たが、そのまゝ一つの椅子に着いて、

『先ほどは、わざわざどうも、ありがたうございました。』

と、やさしい、丁寧な口を利いた。

『いゝえ、お粗末なもので、かへつて恥かしいわ。』

マダムは、あわてゝ打ち消した。さつき、芝居を見てゐる時に、休憩時間が來ると、しきりに出たり入つたりしてゐたが、恐らくあの時に、何か樂屋に贈りものでもしたのだらう。

『それから、こちらね。わたしの店にゐる人なの。』

と言つて、マダムは笑ひながら、美津江の方をチラと見て、

『ミツと言つてゐるの。こゝから近いんだから、ちよい／＼來て、すこし最負にしてくれるとい

らわ。』

と、紹介やら、自分の店の宣傳やらをするのであつた。

『それからね、ミツちゃん。この人、井上金之助さんよ。』

金之助は、微笑をふくんで頭を下げたし、美津江も軽くお辭儀をした。

『アケミさんは、何か店でも出してゐるんですか？』

と、金之助が聞いた。

『ええ。』

マダムは、眼もとに媚びを湛へて、金之助の色の白い、うつくしい横顔を、流し眸に見ながら、

『わたしね、このごろ喫茶店をやつてゐるのよ。』

と、言つた。

『それは、いいですな。——獨立でやつてゐるんですか。』

『まあね。』

マダムが、あいまいな微笑をふくんで見せると、

『あゝ、さうですか……聞くだけヤボですな。』

と言つて、金之助も苦笑を浮べると、美津江の顔をチラと見た。

でも、美津江は端然として、すましてゐた。

マダムと、金之助と、二人の喋つてゐることが、美津江には何だか謎のやうな氣がして、よく分らなかつた。

三

『金之助さんなんか、喫茶店には、餘り來ないのでせう？』

『さうでもありませんな。』

『ちや、これからは、わたしのところにも、時々は來てよ。』

『伺ひませう。』

『エンゼルつていふの。』

『女給さんたちは、たくさんゐるんでせうね？』

『さうね……今、十七八人ゐるかしら。』

『ナカ／＼盛んですな。——どうでせう？ 僕の知つた女ですが、一人使つてくれませんか？』

『いくつなの？』

『二十歳だと思ひますが……すこし年齢を取りすぎてゐるでせうか。若くは見えるたちですが。』

『本當は、十七八くらゐが、いいんだけれども……でも、二十歳くらゐなら、年齢を取りすぎてゐるといふことはないわ。ミツさんなんか、二十歳を越してゐるけれども、お客さんたちは、皆な二十歳前に思つてゐるのよ。』

『さうですか。——こちらは、そんな年齢ですか。』

金之助は、いかにも感心したやうに言つて、改めて美津江の顔を、しみ／＼と見直したが、『僕も、やつぱり、二十歳前だとばかり思つてゐたのですが……とてもお若く見えるですな。』

『あら。』

美津江は、あまりしげ／＼と、まともに自分の顔を見られて、恥かしくなつて、さつと赧くなつた。

『さうでせう。ミツちゃんはきれいだから、年齢に比べると、とても若く見えるんだもの。得たわ。』

『本當に、僕が頼む人を、あなたのところで、使つてくれますか？』

『え、使ふわ。——とにかく、一度本人を、見てからね。』

マダムは言つたが、からかふやうな眼ざしをして、金之助の顔を見て、かすかに笑ひながら、『いづれ、あなたの好い人なんでせうけれど……そんなことを言つても仕方がないから、わた

し、ヤキモチは焼かないわ。連れていらつしやう。』

と、冗談のやうに言つた。

『僕のいい人だなんて、そんなことはありませんよ！』

金之助は、遽かにムキになつて、力づよく否定した。

『とても、氣の毒な境遇の人なんです。折角、愛してゐる人の後を追うて、東京まで出て來たのに、その愛する人から見捨てられて、苦しんでゐるのです。僕は、偶然、或る事情から助けて、ちよつと世話をしてゐるんですが、何か仕事を見つけて、働きたい希望なんです。でも、差當つては、適当な職業の口も、僕などの力では、ナカ／＼見當らないものですから、ちやうど、あなたの話を聞いて、それはいいと思つて、おねがひするんです。だから、眞剣なんです。』

金之助の表情にも、言葉にも、眞實が溢れてゐた。

『わかつたわ。——さういふわけなら本當に、わたし引受けて、間違ひのないやうにしますから。喫茶店の女給だつて、眞面目な職業ですもの。ちよつとも、心配することはないのよ。』

マダムが、心から眞面目になつて引受けると、金之助は、

『どうぞ、お願いします。』

と、頭を下げて頼んだ。

金之助とアケミとは、曾つて金之助が、或るカツフェーの女給に熱中して、いつしよに墮落ま
 でしたことがあつたが、その當時からの知り合である。結局、金之助は、その女給に騙されたの
 である。アケミは同じカツフェーに働いてゐて、二人の間のこと、よく知つてゐるし、その頃
 は、まだ純な金之助が、見す／＼アバ摺れの女給に騙されるのを、氣の毒にも思ひ、同情もして
 ゐた。——そして金之助は、たうとうその女給に、二萬圓といふ金を持ち逃げされた果に、旅廻
 りの俳優にまで、なり下るやうな結果になつたのであつたが——

十二時すぎから、金之助は、アケミや、美津江と別れて、自分の落着いてゐるアパートに歸
 つて来た。

金之助は、明星座の芝居が當りを取つて、當分は東京に落着ける見込みが附いたので、劇團
 の人々から離れ、自分は向島の白髭神社の近くのアパートに、假りの住ひを定めてゐた。

もう遅いから、真直ぐ自分の部屋に歸らうとしたが、偶と思ひ直して、二つばかり手前の部屋
 の前に立ちどまると、コツ、コツと、ノックした。

『はよ。』

すぐに優しい、しづかな女の聲が、返事をしたので、

『まだ、起きてゐたんですか。』

と、金之助は言ひながら、自分でドアをあけた。

ドアには、鍵がかゝつてゐないので、すぐに開いた。

電燈の光りが、六疊ばかりの部屋を、ほのかに照らしてゐる。べつに道具とてもなく、何か佻
 しい感じの部屋の中に、一人の若い女が、まだ寝もやらずに、ぼつねんと坐つてゐた。

電氣の光りを斜めに受けて、顔の半面が明るく、半面は暗い陰影を作つてゐるのであるが、そ
 れが彫像のやうに端正で、美しい。

どこか深い憂ひと、しづかな悲しみを湛へた顔である。大病の後ではないかと思はれるほ
 ど、憔悴してゐるのであるが、そのために一層美しく、氣高く、しかも魅惑的である。

『おかへりなさい。』

しづかに言つて、顔を擡げたのは、意外にも美登里ではないか！

女ひとりの部屋

偶然といふことは、單に小説や、物語の上ばかりにあることではない。事實は小説よりも奇な

りといふ言葉がある通りに、人間の智慧や、想像では思ひも及ばないやうな不思議や、偶然が、この現實の世界には、いくらでも起り得るし、絶えず、どこかに起りつゝある。

岡田公園で、美登里が危ふく身を躍らせようとした時、偶然にもそこに通りかゝつて、やうやく抱き留めたのは、金之助だつた。イヤ、抱き留めたといふよりも、二人とも腰から下の半身がずぶ濡れになつて、這ひ上つたのであるが。——それでも金之助は、美登里の危ふいところを、必死になつて、助けることだけは、どうにか斯うにか、助けたのである。

とにかく、一應、自分の借りてゐる白髭神社の傍のアパートに連れて來てから、既に幾日かを過ぎた。——ちやうど、空いてゐた一部屋を借りて、美登里はそこに、起き臥してゐるのである。必要なものは金之助が、何かと整へてくれるし、出入りの度には一々ノックして訪ねて、いろ／＼細かいことにまで氣を付けてくれるし、ちつとも不自由を感じるやうなこともない。

でも、美登里は、いつまでも斯うして安閑として、金之助の厄介になつてゐるわけには、いかなかつた。金之助とても、經濟的に餘力のある身の上ではない。いくら當つたと言つても、小芝居の役者では、収入など高が知れたものである。自分一人の生活が、どうにか支へられる程度である。そこへ、美登里が、何から何まで厄介になつてしまつたのでは、立ち行くはずはなかつた。(5つまで、こんなことをして、愚圖々々してはゐられない。)

と思ひながら、さて、それならどうしたらいいか？

美登里にも、どうしたらいいのか、分らなかつた。

今更、故郷へおめ／＼と、歸つて行くわけにはいかない。——こんな身體になつてしまつて、何の面目あつて慎之助に會はれるだらう？ 青木先生にだつて、二度と再び會へないやうな氣がする。——會つて會へないことはないとしても、會ふのが恥かしいのである？

(何もかも、失はれてしまつたのだ。どうすることも出来ない。)

美登里は、まつたく途方に暮れてしまつた。

大事な／＼珠を踏みにじられ、打ち碎かれたばかりではない。前途の希望も、光明も、失つてしまつた。

生命までも失はうとしたところを、それだけは金之助の手に救はれたけれども、これから先を、どうして生きて行つたらいいのだらうか？

生きてゆく眼當ても、その力も勇氣もないやうな氣がした。

——さうかといつて、一旦死なうとした身を、斯うして助けられて見れば、二度と死ぬ氣にもなれなかつた。死ぬことが恐ろしいのではない。自から死を求めることすら、何となく億劫なのである。

結局、東京に踏み留つて、誰からも隠れて、何か適当な仕事でも見つけて、働くよりほかなかつた。

そのことを、金之助に話して、相談して見ると、

『それが、いいせう。』

と、金之助はしばらく考へてから、分別くささうに答へた。

『だが、何も焦ることはないですよ。ゆつくり落着いて、適当な仕事が見附かつた時に、働くことにすればいい。』

と言つて、慰めてくれた。

でも、美登里としては、働くことに決心した以上、一日だつて、愚圖々々してはゐられなかつた。

『そんな暢氣にしても、ゐられませんから……どうぞ早く、適当な仕事を、見つけて頂きたいと思ひますわ。どんなことでも、一生懸命に働きますから、よろしくお願ひいたします。』

美登里は、仕事を見附けるにしても、やっぱり金之助の盡力に、すぎるよりほかなかつた。

『ちよつと、お邪魔しても、いいせうか』

金之助は、ドアを開けても、そして美登里が、まだ起きてゐて迎へてくれても、すぐには部屋に入らうとはせず、入口に佇ずんだまゝ聞いた。

夜更のことではあり、女一人の部屋に、断りもせず、つかつか入つて行くのは、何となく憚られるのであつた。——美登里を知つて以来といふもの、それまでの女にたいする復讐心をつかり清算し、身もこゝろも堅く持してゐる金之助だつた。殊に美登里にたいしては全く、兄が妹でも働はるやうな氣持で、たつた二人切りでゐることがあつても、金之助の態度は、謹厳そのものと言つても、よかつた。

『どうぞ。』

美登里は、だから金之助を、信用し切つてゐた。

『では、遅いから、ちよつとだけ失禮しませう。』

と言ひながら、金之助は、やうやく部屋に入つて來たが、

『あなたの氣に入るか、どうか知らないけれども、とにかく、仕事の口が一つ見附かりましたから。』

金之助は、イスに掛けようともせず、立つたまゝ言つた。

『まあ、さう』

美登里の眼も顔も、さすがにパツとかゞやいて、

『どんな仕事か知りませんが、どうも有難う。』

と、お辭儀をした。

金之助の優しい顔には、ほのかな苦笑が浮んだが、

『まだ、そんなお禮を言はれるには、少し早いですよ。』

と、言った。

『だつて、仕事の口を見付けて下すつて、うれしいわ。』

『それが、あまり立派な仕事でもないものだから。』

『わたし、何だつていいんですわ。何でも働くつもりでゐるんですから……働く口が見附かつたといふことだけでありがたいんですの。』

『そんなに美登里さんに喜ばれたり、お禮を言はれたりすると、僕は、かへつて恐縮してしまふな。』

『どうして?』

『喫茶店の女給なんですわ。』

『さう』

『働いて見ますか。』

『えー』

と、美登里は頷いて見せたが、ニコリして、

『喫茶店の女給だつて、何んだつて結構ですわ。』

と、言った。

『それなら、いいですけども……僕は、また、そんな仕事なら、ご免だなんて言はれたら、どうしようかと思つて、實はビク／＼してゐたんです。』

笑顔で言つた金之助の顔には、安堵と、喜びの色が、かゞやいてゐた。

『わたし、今の場合ですもの。そんな贅澤なことを言ふものですか。どんな仕事だつて、働きたいと決心してゐるところですもの。仕事の口があつたといふことだけでうれしいわ。』

『尤も、喫茶店の女給だつて、いろ／＼あるでせうけれども、僕が頼んだのは純喫茶ですから、イヤなことなんか、決してないと請合ひます。』

『それに、自分の心がけにも、依ることですわ。』

美登里はさう言つて、かなしさうに俯垂れると、唇を噛んだ。——不覺にも一生癒ゆることのない傷手を、我身に蒙つたことが思ひ出されて、キリ／＼と胸元が、抉られるやうに痛んで來

た。

『ほんとうに、その通りですから、心配することはないですよ。』
金之助は、傷ましさに眼をうるませたが、やさしく慰めた。
『女給が、十六七人もゐるんださうです。僕は、マダムをよく知つてゐるものですから、直接、マダムに頼んだのです。美登里さんが、いよくそこで働くことになつたら、猶ほ、よく頼みますから。』

『是非、おねがひしますわ。』

美登里は、決心の色を見せて、チラと金之助の顔を見上げたかと思ふと、改めて頭を下げた。

『ぢや、とにかく明日でも、いつしよに行くことにしませう。』

『ええ。』

『では、もう遅いから、今夜はこれで失禮します。』

それだけ言ふと金之助は、たうとう一度も、イスに腰を降ろしもせず、ていねいに會釋をして、しづかに部屋を出て行つた。

三

『あら、しらつしや。』

翌日、早速、金之助は樂屋入りをする前に、美登里を連れて、喫茶店エンゼルに出かけて行つた。

店があいたところで、ちやうどマダムは、朝の身支度をすまして、食事を終つたばかりだつた。金之助が、美登里を連れて來たのを見ると、喜んで迎へてくれた。そして、すぐに二階の自分の部屋に、案内した。狭い階段を上つて行くと、突き當りの六疊だつた。疊の上に緋の絨毯を敷き、窓にも派手な唐草模様のカーテンをかけ、壁際にはシングル・ベッドがおいてあつた。——チャチな洋風ではあるけれども、さすがに女の部屋らしく、色彩でも、部屋の空氣でも、華やかで、艶かしかつた。

『昨晚、おねがひしました人、いつしよに來たんですが。』

と言つて金之助は、おどくしたやうに、自分の後に付き添つて、俯垂れてゐる美登里を、振りかへつた。

『あら、さう』

マダムは、初めて氣が附いたやうに、よく動く、その黒い瞳を、チラと美登里の上に向けたが、その實、疾づくに鋭く觀察してゐたのである。

『まあ、昨夜お話のあつたのは、こちらのことだつたの。』

と言つて、小さなイスを二つ、そこに並べると、

『お掛けなさいな。』

二人に同じやうにすゝめて、如才がなかつた。

『ありがたう。』

金之助は、先づ自分からさきに、腰を降ろして、

『折角ですから、美登里さんも、お掛けになつたらどうです。』

と、遠慮ぶかさうに、しよんぼり立つてゐる美登里を振りかへると、自分も言葉を添へた。

『はう』

美登里は、かすかに返事をする、マダムに向つて、

『失禮します。』

と、會釋をして、素直に金之助と並んで、腰を降ろした。

『いかゞでせうか？ おねがひ出来るでせうか。』

金之助は、氣がかりらしく言つて、マダムの顔色を見へ、

『溫和しさうな方ね。』

『ちつとも擦れたところがない、とても溫和しい人です』

『あら、あなたの保證なの？』

と言つて、マダムは調戲ふやうに、笑つたが、しかし金之助は、飽くまで生真面目な顔で、

『ほんたうに、溫和しい人なんです。僕が、保證します。』

と、力をこめて言つた。

『いいわ。あなたが、そんなに躍起になつて言はなかつた。——一見見れば、分つてゐるから。』

『どうでせう——置いて見ていたとけるでせうか。』

『ええ。ススわ。』

マダムは、ニツコリして頷いた。こゝろの中では、どんなに喜んだことか知れなかつた。——

何といふ幸運だらう？ と思つてゐた。いくら骨を折つて探しても、ろくな女給など一人も見附

からない時代に、ミツエと言ひ、今度またこの女と言ひつゞけさまに二人まで、こんな美しくて

魅力的な女給が、向ふの方から飛び込んで来るなんて？

(この女も、きつと店に出れば、すぐにスターになるわ。)

さう思ひながらマダムは、眼を細めるやうにして、美登里の頭のでつべんから、足の爪先まで

チロ／＼見てゐた。

『何も分りませんけれども……宜しくおねがひいたします。』

美登里は、ホツと安心すると、マダムに向つて頭を下げた。

『これで僕も、やうやく安心しました。——女給なんか初めてのことですから、初めの中は、見習ひといふやうなことでもいいですから……あまり骨の折れない、イヤなことのないやうに、マダムからも十分、氣を付けて下さいませんか。』

金之助が、氣がかりらしく念を押して頼むと、マダムは、

『え、分つてゐるわ。——心配しなくても、大丈夫だから……わたし、引受けたわよ』と笑ひながら言つた。

『おねがひします』

金之助が頭を下げれば、美登里もいつしよになつて、もう一度ていねいに、お辭儀をした。

『お名前を、まだ聞かなかつたけれども、何とおつしやるの？』

マダムに、改つて聞かれて、美登里はかすかに、

『美登里』

と、答へた。

『ミドリ？』

『美しく登る里と、漢字を三字當てゝ書くんです。』

と、金之助が説明すれば、マダムはうなづいて、

『さう。ちやうど、いいわ。ぢや、こゝでは、片假名で書くことにして、やつぱりミドリと呼ぶことにしませうね。女給さんらしい名だね。』
と、言つた。

戀の犠牲

—

『ミツエさん。——こちらね。ミドリさんつて言ふの。今日からうちに来て、お店を働いて貰ふことになつたから、そのつもりで、仲よくしてね。』

マダムに紹介されるまでもなく、二人は、疾づくに顔見知りの仲である。

(ちよつと。)

と呼ばれて、美津江は何氣なく部屋に入つて来たが、美登里と顔を見合せて、二人ともびつくりしてしまつた。

(あつ。)

(まあ！)

聲こそ洩らさなかつたけれども、心の中で叫んだ。

だからマダムから紹介されても、咄嗟には二人とも、挨拶するどころではなかつた。

『……………』

『……………』

無言のまま、眼ばかりかゞやかして、睨み合ふやうにしてゐた。

『どうしたの？』

マダムも、二人の不思議な様子に気が附いて、

『何だかへんだわね。——以前から、知つてるの？』

と、聞いた。

『さへえ。』

美津江が、あわてゝ打ち消すと、美登里に向つて、

『どうぞ、宜しく。』

と、言つた。

『わたくしこそ、どうぞ宜しく、おねがひいたします。』

美登里も、同じやうに言つて、頭を下げたが、その時、口惜しさと、腹立たしさが、ぐつと頭

を擡げた。

どういふわけで美津江が、こんな喫茶店なんか、女給になつてゐるのか、分らなかつた。

でも、美津江が、こゝにゐる以上、美登里は、自分がいつしよになつて、働くわけにはいかな
いと、咄嗟に心で決めた。

（あゝ、やつぱりわたしは、こゝから出て行かなければならないのだわ。』

口惜しい、焦る氣持を、じつと努めて抑へつけるやうにして、何喰はぬ顔をしてゐなければな
らないのが、美登里としては、とても辛かつた。

『二人とも、何だかへんだわね。』

マダムは、怪訝さうな表情をしてゐたが、それ切り、べつに深くも追究しようともしなかつ
た。

『では、ミツエさんは先輩だから、ミドリさんに分らないことは、いろ／＼教へてあげてね。』
と言ふと、バア・テンドーに呼ばれて、部屋から出て行つた。

二

美登里は、折角、金之助が見附けてくれた仕事の口だつたけれども、逃げ出すよりほかはない
と思ひ、逃げ出す決心だつた。——でも、さう決心はしても、逃げ出す機會なんか、ナカ／＼見

附からず、仕事の忙がしさに追はれて、つい二日経ち、三日すぎてしまつた……

その間、金之助は毎日、ちよつとの暇を見ては、美登里に會ひに来たが、事情を打ち明けて、逃げ出す相談をするといふわけにも、いかなかつた。

店を閉めるのが遅く、それから風呂に入つたりすると、寢床に入るのは、どうしても一時すぎになる。どうかすると、二時になることもあつた。

狭くしい部屋に、蒲團を並べて寝るのであつたが、皆な疲れ切つてゐるので、横になつたかと思ふと、すぐ眠つてしまふ。躰を立てる者、寢言を喋る者、身體が怠るいらしく、どたりどたりと、手足を投げ出す者、齒ぎしむを噛む者などがあつて、寢てゐる間でも、かなり騒うくし。

(今夜こそ。)

と、美登里は晝間の中から、固く決心してゐた。

一時頃、寢に就いたが、二時が打つても、三時を打つのを聞いても、美登里は眠らなかつた。四時を打つて、枕もとの窓が、ほのかに白み初めてから、こつそりと寢床から抜け出した。

そつと足音を忍ばせて、階段を降りた。裏口の締りを開けて、細い露地に出ると、漸く、ほつとしたと思つたら、

『ミドリさん。』

かすかに呼びとめられて、ぎよつとして振り返ると、

『どこへ行くの？』

と、低い聲で言つて、つか／＼と近づいて來たのは、美津江ではないか。

『あつ。』

美登里は、さつと顔色を變へて、立ちすくんだ。

『いいよ。そんなに、びつくりしなくても、大丈夫だから。』

美津江は、ニコ／＼した笑顔で、親しさに言つた。

『わたしは、あなたの味方だから、心配しなくてもいいの。』

と言はれても、美登里は遽かに信ずることが出來ず、

『……………』

無言のまゝ、眼を見張るやうにして、息を呑んだ。

『どこへ行くの？』

と聞かれても、行く當てなんかあるはずがない。

『……………』